

LA REVUO ORIENTA

浩

ラ・レヴュー・オリエンタ第九年第三號
昭和三年三月一日發行(毎月一回一日發行)

エスペラント語一ラ・レヴュー・オリエンタ

J
A
R
O
I
X
·
N
I
R
O
3
·
M
A
R
T
O
·
1
9
2
8

MONATA ORGANO DE JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

第九年

第三號

目次 (ENHAVO)

理解と希望.....	土岐善麿	65
TRA ESPERANTUJO		
海外消息及内地報道.....		66
POR LERNANTOJ		
ザメンホフの著書より.....	松本清彦	71
エスペラント初級講座.....	松本清彦	72
エスペラント中級講座.....	吉野櫻彦	74
我が學校生活より〔對譯〕.....	森露夫	76
活躍のベルリンへ〔滯歐日記より〕.....	小坂狷二郎	78
和文エス譯添削欄.....	編輯	80
他山の石.....	小坂狷二郎	82
フアラオーノ〔泰西エス文藝紹介〕.....	曾根崎一	84
蜜蜂の如く.....	川崎直好	87
閑人閑語.....	岡本好次	88
質疑應答.....	小坂狷二	89
LITERATURO		
博物館で〔萩原井泉水原作エス譯〕.....	佐々城松榮	90
魚河岸〔芥川龍之介原作エス譯〕.....	川田啓吉	91
運命論者〔國木田獨步原作エス譯〕.....	鷺見良彦	94
DIVERSAJ		
會員の聲.....		96

JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

TOKIO, Uşigome-ku,
Ŝin-Ogaŭa-maĉi III-14.

[Jara abono internacia 7 svisaj frankoj]

新小川町三ノ吉
東京市牛込區
財團 法人 日本エスペラント學會發行

編 輯 後 記

★四月の大会も近づきました。大会プログラムその他は別項記載の通りです。四月號はなるべく三月下旬にだして大会参加の方々の間にあふ様にしたいと思ひます。

★劃期的第一回普選で名譽の榮冠をえられた新代議士 466 名の中で我が學會々員は斯波貞吉(再)、竹下文隆(新) 二氏です。猶我エス運動の favoranto たる杉浦武雄氏も再選されました。こゝに謹んで祝意を表します。尙外にも會員でなく esperanto favorantoj は相當ある事と思ひます。

★例の請願は臨時議會の會期が長ければ提出します。

★12月提唱の會員倍加運動に御努力下さいました方々の御芳名は本誌廣告第二頁へ掲載致しました。お蔭で三百數十人の新會員をますことを得て大變よろこばしく存じます。

★「會員の聲」への投書はなるべくあまり polemiko を引おこすような議論ばつたものよりも interesa なものや希望をのべる程度のもを特に歓迎します。

★故東宮氏遺兒教育後援會の寄附金募集は本月末日締切ですから至急御申込の程な。(詳細は本誌廣告第四頁を見られよ。)

★一般の御投稿を歓迎致します。

編 輯 部

★學會取次の Heroldo de Esp. U. E. A. の Esp. は先般取まこめて送金をしましたから、その中に雑誌が御手許へつく事と思ひます。

★Internacia Scienca Asocio Esperantista へ入會の方々も最近經めて送金をしました。今度はすべて直接 Bulteno がお手許へゆく筈ですから四月上旬頃迄には一月の Bulteno が到着すると思ひます。(Bulteno は年四回發行)。(これまでの方々は一月の bulteno を學會へきたのを轉送致しました。未だ御受取にならぬ方は御紹介を。尙ごなたか昨年夏頃御一人同 Asocio へ御入會を「口頭で」申出られた(學會にて)まゝ、當方で失念してしまつた様に思つてゐますが、もし申出になつたのにまだ bulteno を一度も御受取なき方は申出下さい。昨年十月頃以後御申込の方はまだです。

外 國 雜 誌 係

學會主催 エスペラント常設講習

★初 等 科 (三ヶ月を一期間とす。1月、4月、7月、10月に新學期開講)

會 場——東京市四谷區旭町四 二葉保育園

期 日——毎週木曜日午後 7-9 時

會 費——一ヶ月 50 錢 (毎月 15 日以後入會は半額)

教科書——井上氏: エス讀本

★中 等 科

會 場——東京市牛込區新小川町 3 の 14 日本エスペラント學會

期 日——毎週金曜日午後 7-9 時

會 費——一ヶ月 50 錢 (初等科に同じ)

教科書——一定せず

學會主催 エス語研究會 (水曜會)

毎週水曜日午後正七時より (時間勵行) 開始。本の輪講をします。今 George Dandin をやつてゐます。會費無料

東京市牛込區
新小川町 3 の 14

財團
法人

日本エスペラント學會

振替口座
東京 11325 番

LA REVUE ORIENTA

★ JARO IX, N-RO 3 ★ MONATA ORGANO DE J. E. I. ★ MARTO, 1928 ★

理解と希望

東京朝日調査部長 土 岐 善 麿

『どうでした、エスペラントは通用しますか?』

旅から歸つて來ると、よくかう訊かれる。

『通用しますとも——エスペランティストの間では。』

わかり切つた返答に過ぎない。エスペラントがエスペランティストの間に通用することは神戸から乗つた歐洲航路の汽船が印度洋を渡つてマルセーユに着くよりも、もつと平凡な事實だ。然し、こんな返答で、その訊いた人は一應満足する。満足したやうな顔をする。

本統のところは、いきなり逢つたものに、いきなりエスペラントを話して、それがわかるかといふ質問なのだ。だが、さういふ時代は、いはゆるエスペランティストといふものがあるなくなつたときに起る事實で、其時はイギリス人がイギリス語をはなすか、フランス人がフランス語をはなすか、ドイツ人がドイツ語をはなすかと訊くのと同じ様な事になる。

これが國際語としての理想の實現した時代で、而もそんな時代が、決してさう遠い將來でない様な氣がする。さう思つて歸つて來た。

ダンチツヒの世界大會には、何しろ千人近くの會員が集り、參加國三十有六とかいふのだから、随分、種々な民族、種々な國民のエスペラントを聞いたことになる。大抵は、僕にもはつきりよくわかるのが多かつたけれどもなかなかわかり難いのもあつた。わかり難いのは、イギリス語的な發音のがおもで、イギリス人やアメリカ人は、あの大きなふかし立てのジャガイモを頬ばつて、口の中でこぼをモグモグころがすやうな發音をしたり、物をいふには鼻だけあればいいといふやうな發音をしたりするので、わかるべきものがわからなくなる。

元來エスペラントは、相互にわかるといふことが第一の存在理由だ。國際的に理解しあふための國際語なのだから、それをわからなく發音したり、發想したりすることぐらゐ馬鹿馬鹿しいことはない。いかに會話が熟達してゐるからといって、自分の國語のやうに

流暢潤達にあるひはあいまいもこにしやべる必要はない。それをむしろ得意にしてゐるエスペランティストは、自覺の第一において缺けてゐるわけだ。

其の點で、僕は最も博士プリグアに感心した。プリグアに對しては日本のエスペランティストの中にも一種の反感を持つてゐるものがあるけれど、然し其文章なり辯舌なり會話なりにおいては、何とんでもエスペランティストの第一人者の中に數へなければならぬまい。

僕はジュネヴに滞在してゐるさき、初めて U. E. A. の本部に博士を訪れた。僕が感心したのは、さもなくば現在この方面の大先輩で、いかに上手に、早口に、いかにおびたゞしい語彙を並べて、スラスラペラペラと、僕をおどろかせることは何でもないはずなのだ。初對面の決心をして、本部のはしご段をあがりつゝ、正直のところ僕はいさゝかそれを心配した。わからなかつたら、ママヨ黙つて歸るばかりだと、腹をきめてゐたのだが、すゝめられた椅子におこなしく腰をおろすと、博士のいふことが實によくわかる、ヤコブ君のいふこともわかる。クロイツ君のいふこともわかる。もつとも、さうこみいつた交渉などいふものをしてたわけではなく、たゞ通常の會話に過ぎないが、エスペラントに對する僕の勇氣が、この會見において正に百倍したことは事實だ。二度三度、僕は本部を訪れた。博士夫妻と一緒に、レマン湖の岸邊で盃をあげながら、僕のエスペラントに對する愛着の深められたことは、僕の生涯に記念されなければならない。これが本統だと思ふ。上手は上手なりに、下手は下手なりに、まづエスペラントは簡單明快、わかるのが第一。

いま日本のエスペラント運動に第一着手として希望したいことの二三。——會話の練習。古典の翻譯。創作の發表。どうもエスペランティストが神學者の養成にのみ主力を盡してゐる情勢にあきたりない。先輩達は、エスペラントによつて、もつと日本の古い文化新しい文化を世界にしめすやうな獨自の仕事になづさはつてほしい。等。

海外報道

第二十回エスペラント 萬國大會

本年ベルギーの首都アントワープに開催される第二十回エスペラント萬國大會の日割は次の如く決定した。

8月1日。受付事務所を開く。2日3日は參會者懇親のための各種催物。

8月4日。夕刻より大會開會式。午前中にはエスペラント夏季大學の開講。

8月5日。教會禮拜、街上宣傳行列、市の歡迎會等及び音樂會。

8月6日-7日。大會協議會、分科會等。

8月8日。ブリュッセルへ遠足。

8月9日。協議會、夏季大學講座、音樂會等。

8月10日。夕刻より國際大舞踏會。

8月11日。大會閉會式。

かくの如く前後一週間に渉りこの大會終了後直ちに karavano を組織してベルギー觀光をなす事になつて居る。大會參會者の爲には鐵道約3割引。尙この大會に際して“Esperantista Literatura Landjuvelo”の名の下に國際的文藝競技會を催す筈で各エスペラント會等で賞金や題目を寄付する様に懇請して居る。

教育家に告ぐ

北米合衆國ニューヨーク市にある國際補助語協會 (International Auxiliary Language Association) と瑞西ジュネーヴ市にあるルソー學院 (Institut J. J. Rousseau) は協力して國際語問題の解決に當る事に話が定まつた。

諸君已に御承知の様にこの國際補助語協會は1924年にニューヨークに設立され、その目的とする所は最も完全なる國際語を選定せんとするにある。そしてその審査に際しても社會學的言語學的教育學の見地より各種の國際語を客觀的に批判し採用しやうと云ふのである。偶々その協會の代表者たるモリス夫人が昨夏歐洲に渡りダンチツヒの大會に参加しその後ジュネーヴ等を訪ひ同地のルソー學院と完全なる了解と共鳴を得て協同して事業にあたるべき話が出來上つたらしい。

ルソー學院は教育學專攻の學院であるが夙にエスペラントと深い關係にあり同學院長のボグエー氏(精神分析學殊に兒童心理研究者)の如きも一昨年ジュネーヴに萬國大會の開催

されし際夏季大學講座として「精神分析學と教育」の題下にエス語講演をしその他絶えずエスペラント運動の中軸にあつて吾々の運動に努力を續けて居る。

そして兩者の今後の事業は、學生或は兒童に或る種國際語の教授をなしてその進歩の状況を計り、又各種のテストを行ひそのテストを基として各種の實驗を行ひ以て完全な國際語を選定しやうと云ふのである。そしてその爲に各國各種の教育家の協同を望んで居る。

吾々エスペランチストは已にエス語が完全にして今更そのテストを必要としないとの理由を以て敢てかゝる試みをボイコットする必要はないと思ふ。何故ならばその試みが眞實に公平眞率に行はれるならば吾人に對して一層確實な科學的基礎を與へこそすれ何等の害は無いからである。エス語を代表してこの試みに協同する事になつた獨逸エスペラント協會はこの試みを實現する爲に各國エスペランチスト教育家の協力を心から熱望して居る。同學の士は下記宛に直接御紹介を乞ふ。

D-ro Dietterle, Esperanto Instituto por la Germana Respubliko, Leipzig W 31, Seumestr. 10, Germanujo.

巴里商業會議所の新會頭

一月十日巴里商業會議所會頭の改選が行はれアンドレ・ボーデー氏 (André Baudet) 新しく會頭に選任せられた。同氏はエスペラント運動と深い關係にあり、1922年國際聯盟常設事務局の主催でもつて上記のジュネーヴのルソー學院に國際教育會議開催されるや巴里商業會議所代表として同會議に参加してエス語の爲に氣を吐き、翌1923年伊太利のヴェネチアに開催された劃期的な國際會議、エス語を主用語とせる國際商業會議にも列席してエス語を實用した。その翌年1924年5月に巴里で開かれた國際商業會議にもエス語を商業界に採用する爲大いに盡力する所があつた。彼はかくて片時もエス語を實用化し進んで人に勧めることを忘れずラヂオに又講演に商業會議所についての話をする時には必ずエス語によつてこの會議所がいかによい便益を得たか又如何に同會議所はそれを實用して居るかを付け加へるのを忘れなかつた。

英國エスペラント協會の會長マーチャント氏がロンドン商業會議所の會頭であると共に、ここに有力な二同志が二有力都市の商業會議所に長となつた事實は吾々の前途に明るい光を投げるものである。

憂國の士は國語尊重

昨年12月29日より本年1月6日にかけて英國ロンドンの University College で教育協會大會 (Conference of Educational Associations) が開催された。英國エスペラント協會はこの機を逸せずエスペラント賣店を同構内に設け、巧妙な大ポスターを掲げて參會者の注意を惹いた。

同會期中諸現代語協會の集會に司會者となつた獨逸駐英大使は演説して曰く、エスペラントの如き人造語は商業上の目的の爲には便利であるが、國の魂はたゞ國語によつてのみ表現され得る外國語の強制は甚しき惡影響を及ぼすものであつて外國語を習得する事により商業上の利益を受けることは多いであらうけれどもそれによつてその者の魂は混血兒ならぬ混血國人になつてしまふのである。

エスペランティストは國語を尊重するが故に尙更エスペラントの必要を高唱する。英語の枷から獨逸語の鎖から吾々を解放して國語の健全な發達を可能ならしめるものはたゞエスペラントあるのみと云ふ事を吾人は確信するのである。ましてや思想を完全に表現せんとするには國語によるに非ざれば全く不可能なりと云ふに至つては先づエスペラントを勉強して御覽なさいと云ふより致し方ない。

種を播く人々

エスペラントの種を播く人々の中でも吾人が最も期待を置くものは小學校中學校の先生達である。我々同志の中にも小學校中學校に於て先生の片言隻句の中にたゞエスペラントと云ふ言葉があつたゞけで後年いつ迄たつても變らない熱心な同志になつたものが何人居るかわからない。現在の利益にも尤もらしい理窟にも超然とした最も殉情的な理想主義者は小學中學の小さい生徒達だからである。この意味に於てその教育者達に吾々は最大の期待をかけて居る。

昨年來12月31日、リトヴィアの片田舎の町に同國トラカイ (Trakai) 地方の男女教員の大會が開かれた。會するもの80名。次の如き決議が行はれた。「本大會は國際語エスペラ

ントが有用にして且つ諸學校に普及せられ各種目的に廣汎に使用せらるゝに鑑み次項を決議す。1. 各男女教員に國際語エス語の勉學を勸告す。2. 各方法によりて斯語を支持し普及す。3. 夏期休暇中、小學校男女教員の爲にエス語講習を開催する様文部省に請願す。」

この僻地のこのさゝやかな集會ではあるが吾々はその中に種播く人々の尊い努力を見る事が出来る。この種が芽ばえ花咲き實を結ぶ日を心から祈らずには居られない。

瑞典の好望

歐洲に於て同じく吾々の如く英語が後生大事にされる國に瑞典、ノールウェーがある。出世の夢を抱くものが英語の辭書に青息吐息をついて居る間に實際に平易な國際語を必要とする瑞典の労働者階級は賢くもエスペラントの學習を始めた。同國の労働者教育協會 (Arbetarnes Bildnings-Förbund) に於て學習せられる外國語は英語が第一位を占めて居た。しかるに三年前より毎年毎年エスペラントを學習するものがふえ現在に於ては英語エス語が伯仲し特に本年はエス語が抜んでやうとして居る。されば社會民主々義婦人協會の機關誌 „Morgonbris“ はエス語講座を設け、又1929年ウキーンに開催される筈の社會民主々義青年世界聯盟の大會はエス語を唯一の大會用語と決定せる爲青年社會主義者達は熱心にエス語を勉強して居り、加ふるに最近世界的宣傳家 Andreo Ĉe 氏の各地宣傳行脚の爲に益々一般的に普及された。

その結果が昨年末12月30日、瑞典社會民主黨の最大地域であるストックホルムを中心とする地方の集會が開かれた時に本年の夏に開かれる同黨大會へ提出すべき事項につき討議が行はれた。その中にはエス語に關する事も提議せられて活潑な討論の後に次の如き提案をなす事になつた。「社會民主黨大會は次の事を決定すべし。1. 労働黨議員をして學校の教課目中に少くとも隨意課目としてエス語を編入すべき様盡力せしめる事。2. 國家はエス語教師養成のため補助金を下付する事。3. 社會民主黨は凡ゆる方法を講じてエス語運動の智識を普及しこの運動に精神的援助を與へる事。」

此の提案は三萬人の黨員を含む同地方よりの提議として大會に出す事になつた爲個人的提案と異り相當の有力な討議題目となるであらうと豫想されて居る。

内地報道

第拾六回日本エスペラント大會

【第二報】

特色

I. 大會會計の公開

私共が本大會開催を計畫するに當つて先づ第一に困つたのは、從來大會の會計が明細に公表されなかつた事です。故に一つには今後大會を開催する、方々の参考にも、且つ又私共の責任を明にする爲商學士柴田恭二君を煩はして會計の明確な公開を期する次第です。

II. 大會參加費の徴集

大會會計は其結果の公表と共に、更に參會者諸君の適正な分擔によつて益々その公開性を増します。即ち參加者諸君は大會の有限責任分擔者、開催者は無限責任者として大會は一層公共的なものとなるを信じます。

今回は慎重商量の結果

參加費 金五拾錢

をいたしました。

參加費は三月廿日から受付け、引換に**大會參加證**及び *Kongresa libro* (大會日程の詳細、大會の組織、大會協議會重要議案内容、分科會内容等大會參加者の豫備知識となるべきものを載す) をお送りします。熱心な同志は是非之を備えて大會參加の用意をして下さい。小爲替宛先は： 大阪市北區北同心町二丁目卅五番地 柴田恭二

III. Aliĝilo:

本誌廣告第1頁に切取の**參加申込書**が附けてあります故參加希望者は必ず本誌到着次第成べく早く**エスペラントで記入**の上下記大會委員會へお送り下さい。大會當日は混雑しますから。又申込後の御取消は少しもかまいませんから。

滿洲エス聯盟の成立

滿洲におけるエス運動は近年著しく盛んになりつゝあるがロシヤの同志を主とするハルビンのエス會以外は主として南滿洲における我國同志の活躍が主である。而して之迄未だ全く各地同志相互間の連絡統一がなく甚だ遺憾とせられてゐたが昨年末一部有志の希望あり

PROGRAMO

場所： 北區常安町大阪醫科大學記念館

四月七日(土曜日) 午後七時

1. 大會發會式：
開催地代表者挨拶。
各地代表挨拶。

2. 大會協議會：

四月八日(日曜日) 午前九時

1. 日本エスペラント學會維持員會。
2. 分科會。
3. 大會協議會。
4. 大會閉會茶話會。

★大會參加費概算

大會參加費	¥. 0.50
八日中食	0.50
市内電車賃	0.25
	¥ 1.25

宿泊費(合宿の計畫あり。二圓以下の豫定)

◎提案及び分科會の申込

提案支持者十名以上
分科會開催支持者五名以上
趣旨、理由明記の上
締切：三月拾五日

までに下記大會委員會宛申込まれたし。

◎地方會の申出及び Mandato.

地方代表の挨拶及び協議會の地方會に関する議事整理上各地方會は出来得れば其の代表者に Mandato (委任狀) を持参せしめて下さい。尙名稱、組織、會員數、通信責任者を大會委員會まで御通告下さい。

大阪エスペラント會 大會委員會

宛名：大阪府下岡町壽通四丁目奥村氏方
藤間常太郎宛

先づ奉天エス會は1月7日聯盟創立について賛同と援助を在滿同志に檄したる結果多數の賛同と支持により同月22日奉天滿鐵俱樂部に於て聯盟創立協議會を開催した。當日大連より尾花、淵田、黒住の三氏及開原より内倉氏出席規約を協定の上、愈々こゝに滿洲エス聯盟 (Manĉuria Esperanto-Federacio) が成立するに至つた。その晩5時半より支那料理店に

懇親會を開く。會するもの15名。歡をつくして散會。因みに第一回總會は4月或は5月に開く豫定である。

同事務所は奉天の滿洲醫科大學解剖學教室内におき奉天エス會が事務を處理する。

明治藥專のエス語熱

明治藥學專門學校（東京市外代々幡町）では昨秋から全學生の約半數が熱心に同志となつてエス語講習をうけてゐる。講師は倉地銳次氏。これは同校々長恩田重信氏が大變熱心にこの舉を支持されてゐるからである。同氏は毎月門下生へ配布される folio の中へも「近頃生徒の半分位が、緑の星の章を胸につけてエスペラント語で話してゐるが禁酒會の徽章なんかより遙に有意義だ」と書いてゐられるにみても又學校の職員一覽表の中へ獨逸語ラテン語講師などならべてエス語講師の名をかいておるところは外に類があるまい。

尙同校出身者の機關誌たる「明友藥劑誌」へは昨春以來福富義雄氏の御努力により、毎號エス初等講座や藥品名のエス名一覽其他が連載されてゐるのも大變結構なことで在校生のエス語熱と相俟つて、藥學界における我々の kampo が大いに擴大せられたる事を思つて愉快禁することを得ない。

大空詩人とエス語

「お互は・あの大空のやうに」といふ moto をひつさげて常に晴れ渡つた大空を讚美し兎角青空を仰ぐ日の少い都人士をいましめ街頭になつて自然禮讃の音楽を奏でゝゐる mandolinist 永井叔氏は從來からエス語にあこがれをいだいてゐられたが今後大いにエス語を學んで數年後にこの緑の言葉を使用して世界音楽行脚の途にのぼりたいと語つてゐられる因みに同氏が出版してゐられる「大空詩聞」といふ月刊新聞を“Granda ĉielo”とエス語で命名しエス文を挿入する。

東京

慶大醫學部エス會——1月28日17時より本郷元町文化アパートメントで同會主催例會：都下 J. E. M. A. 會員約40名出席。小坂猶二氏のエス語講演あり。會員一同今更ながらエス語の美しさに酔はされる。閉會21時半。猶慶大醫學部エス會は會長望月周三郎教授、教授、講師、醫員、學生、看護婦等よりなる會員40名、春秋二回の定期初等講習の外、毎週三回以上の講習を開き大いに醫學部内の宣傳に努めてゐる（草刈氏報）

★ 2月9日 15時より慶應エス會では同會創立以來の熱心な Kunlaboranto 中村喜久夫氏の卒業を祝つて、送別會を塾内佛教青年會チャムプロで開催、試験前とて會する者は少數だつたがそれぞれ同氏に就いての回想を述べ、17時頃迄面白く過した。

クララ會：2月19日 13時半よりお茶の水文化アパートメントで小坂氏歸朝歓迎、井上氏結婚祝賀、竹内、田中、二氏女高師卒業祝ひの集會を三宅ひさの氏司會の下に開く。男子8名、女子廿五名出席。主客の挨拶會員數氏の暗誦及び唱歌あり。小坂氏の歐米婦人談、クララの墓を親しく訪はれしこと、ザメンホフの生れし家、その町の様などを見るが如くに話され、子女のエスペラント化が婦人に、母に、俟つところが多いと説いて出席の若い姉妹達を激動され、一同深い興味と感激を以て傾聴した。小坂氏が持参された蓄音器によりてプリヴァ氏の演説及びエス語發音に關する注意を聴き、これも同氏の紹介による「大空詩聞」の永井氏のマンドリンに興じ、歡談のうちに16時半過ぎ散會した。

仙臺

2月9日 14時半 二高校内生徒集會所に於て茶話會を催し、多田會長、伊坂副會長、菊澤季生氏其他會員多數の出席あり、多田教授は古い雑誌の Esp. の記事、大毎紙の暴論及テイエデマンの「世界字母論」の妄論に對し痛烈なる反駁を試みられたる後菊澤氏は Vojo, Tagiŝo を歌はれた。

逗子

1月26日 開成中學に於て13時より全校の職員及生徒に對し講演會を催す。清水農學校長（學會監事）の講演に次いで横須賀の小川梅吉氏（卒業生）Esp. にて追懷談を試み松葉菊延氏通譯。最後に清水氏の通譯にて松葉氏「Esp. の實用」の題下に講演した。同校々長奥宮衛氏は横須賀エスペラント協會の名誉會頭であるが、近く同校にも講習會が開催される豫定である。

名古屋

昨年11月3日 明治節を紀念する爲名古屋鐵道局に『名鐵エスペラント研究會』を設立し、11月7日を第一回講習日とし爾後毎週月木、中京の權威白木欽松氏を Gvidisto として、二十有六名の（内三名 fino）會員は熱心に初等講習を受け12月22日一人の脱會者なく講習を終る。更に越えて11月12日本年度第一回の研究會開催、以後本日に至る迄前年の如く毎週月木の二日宛繼續研究中、現在に於ては會員中3名の婦人及二三の通勤者を除き公務に支障を來さざる範圍に於て研究繼續。（但し中等程度）尙有志の者の

み土曜日の午後クレストマシーナの研究中。
 尙名鐵エス研究會の幹事は西脇弘道、新井憲一兩氏就任専ら同會の活動に奔走されてゐる
 ★名古屋エスベラント協會主催の初等講習は2月3日より毎週火金の二回 19.30時-22時開催(十回終了)。講習生25名、講師山田弘氏。引續いて下村鑛造氏指導の下に來る3月13日より同協會階上に於て中等科初期開催と決定毎週火金の二回、用書は學會の「中等讀本」。初等講習を終へし一般同志の來會を歓迎して居る。中等科開講中、用書「倫敦塔」、講師白木氏。詳細は大學病院前電停北半町東側同協會宛照會を。(山田弘氏報)

千葉

久しく眠つてゐた醫大のエス會は鈴木正夫氏の赴任と共に revigligi した。前學期末に „Foliaro-klubo“ と命名。今學期に至り十數名の新たな fervoruloj を加えた。★2月22日夕、久しく本校に教鞭をこられ、klubo の seminto たる西博士の送別を兼ねて學期末納會を催す。西博士、鈴木助教授外會する者18名、席上餘興として klubano の violonludo, kantado 等あり。尙ほ diskutado に入り komitato の設置案決議され komitatanoj 4名を推薦した。(光武氏報)

大津

大津エス會は中大路、山本、園田、中村、中山、植村諸氏の不撓的努力により同地のエス運動は着々成功を収めつつあるが、近々同會主催の下に講習を催す計劃がある。



〔寫眞説明〕 前列右より山本、園田、中村。後列中大路、中村、植村の諸氏。ザ博士像は植村氏の描きしもの

神戸

神戸エスベラント會は本年度より下記のプログラマーにより同地のエス運動を擴めて行くことに決定した。昨年より同地婦人間に於けるエス研究熱旺んになり講師月本、前田氏の指導の下に今回東京のクララ會に對比すべく神戸クララ會を組織したが、會員總數は十名にして、今後益々サミデーアニーノを糾合すべく努力中。

毎曜火木午後二時よりクララ會講師前田氏
 同 木 午後七時より神戸エス會例會
 同 金 午後七時より研究會、月本氏宅にてクレストマシーナ輪講。

大阪

醫大エス俱樂部では創立以來毎週一回研究會を繼續してゐます。殊に病理教室の安田氏は指導者としてすこぶる熱心にその任にあたられ學生も四月から大いにやるさいきこんでゐます。(農野氏報)

★山中英男氏主宰の“Pioniro”誌の第二號は美装をこらして發刊された。謄寫版刷菊半截60頁。(價 15錢) 希望者は大阪府茨木町1594 同氏宛申込の事。

鳥取縣

氣高郡勝部村で藤田幸壽氏の主催の下に1月25-2月2日講習會開催。講師は龜岡の普及會派遣の山川英志氏。十餘名參加。★西伯郡日吉津小學校で1月25日-2月1日講習會開催。講師 安達治純氏。

龜岡

京都府龜岡エス普及會では2月9、10二日間1日8時間宛で速成講習開催。10名參加、山田氏指導。2月19日京都カニヤ店主 中原氏等一行同會訪問 Privat の disko をかこみ歡談した。

大連

2月6日-17日 同市中日文化協會内に於て尾坂政男、尾花芳雄兩氏講師の下に初等講習會開催、受講者數十名、盛況裡に終講した。尙引續き研究會開催の筈。

★柳田國男氏——東京市外砧村成城學園前へ御轉居。

★駒井鋼之助氏——大阪府豐能郡麻田村螢ヶ池 1422へ轉居さる。

★油仁之助氏——京城府櫻井町 2の226 へ轉居さる。

★安部順平氏——1月16日 逝去さる。深く哀悼の意を表します。

★川原次吉郎氏——東京市外馬込町霜田 268 綠ヶ丘へ轉居さる。

新聞雑誌とエス語

★時事新報主催の世界一周競争に際してはエス語を使用すべしと主張す。(時事新報投書)

★よみうり(2月17日)は小坂猶二氏著「エス捷徑」に関する西成甫博士の批評を掲ぐ。

★第十六回日本エスベラント大會開かる。(記事博多日日)

★貯金局に於ける熱心なる同志、同局事務官眞藤毅氏は「逓信協會雜誌」1月誌に「通信事業とエスベラント」の題下に通信業務よりのエス語必要を論述された。

Zamenhof の著書より

[6]

松本清彦

(15)

a) *plaĉivola*.

これは人のお氣に召し度い、と云ふ意味で *plaĉema*, *koketa* 等と同様に用ひられてゐます。而し *koketa* 等より餘程軽い感じがして、面白く *kunmeti* した言葉だと思ひます。

Ĉirkaŭ la buŝo ludis svarmo da ridetoj, jen plaĉivolaj, jen petolaj.

(譯) …口許には微笑が漂つてゐる。それが或時は媚びるが如く、或時は戯るゝが如く。
(p. 49)

b) *devante* と *scianta*

(i) …*devante* tamen la morgaŭan tagon, vekiginte, diri al si: mi ankoraŭ nenion scias!

(譯) それにも拘らず翌朝眼が醒めることやつぱり彼女は咄くより外はなかつた。—私は未だ何も知つてゐない。(p. 58)

(ii) …, sed mi ja estas pli *scianta* ol ŝi!

(譯) あたしの方が先生よりよつぽと出来るわ。(p. 59)

此場合の *estas* ~*anta* は無論、tempo を正確に示す爲の現在時の進行形ではなく、*mi ja pli scias ol ŝi* を一層強めて寧ろ *povoscias* と云ふ様な意味を臭はせたものではなからうかと思ひます。

c) *aŭskulto*

次に掲げた例に依つて見るに、*aŭskulti* を單に抽象化した *aŭskulto* なる名詞を以て、*aŭskulta sento*, *aŭskulta nervo* の意味を表したものと見えます。

Ŝia aŭskulto videble estis streĉita, …

(譯) 彼女は耳を聴てゝゐたのだつた。
(p. 101)

d) *opinieble*.

この文字などはモットモット廣く一般に用ひられてもよさそうなものです。

Kial do ŝi en la socia hierarĥio en la regiono de la homaj laboroj, profitoj kaj honoroj, starigis sur tiu plej malalta ŝtupo, sur kiu opinieble devis stari nur la plej malfeliĉaj, …

(譯) それならば何故彼女はその社會的階級に於て、教養が人間に與へて呉れる安泰な生活からは最も遠くにゐる最も不幸な人のみが住むとしか考へられないあの最も低い階級に立つたのだらうか。(p. 131)

e) *konstanta*.

konstanta は不易の、不變の、と云ふ意味で

すが次の用例では、これを極く軽く用ひてゐます。ありきたりの *kie vi nun loĝas?* の *nun* もあまり *konstante* に用ふるゝあきが來ます。然し嚴格な意味に於ての兩者の區別は認めればなりません。

(i) *Kie vi loĝas konstante, en la kamparo aŭ ĉi tie?*

(譯) あなたどこにいつも住んでゐらつしやるの。田舎? それともこゝ? (p. 163)

(ii) *Dirante tion, ŝi konstante ridis, …*

(譯) かう云ひ乍ら彼女はひつきりなしに笑つた。(p. 164)

f) *troigi*.

文字通りには度を過すと云ふ意味になりますが、それから轉じて、大袈裟に言ふ、針小棒大に言ふ意味になります。英語の *to go too far* と云つた氣持です。尙 *pligrandigi* を以て此意味に用ひた例もありますが、(中等讀本 p. 14, l. 21 參照) 孰れにせよ、其場合々に應じて之を活用してゆき度いものです。

Vi troigas, mia kara, ŝi diris kun plena indiferenteco.

(譯) 「あなた誇張するのれ」と彼女は全然無關心な様子で云つた。(p. 170)

g) *klopoda* と *peneme*.

(i) *Estas vero, estas vero! kun infano oni ne povas, tio estas tro multekosta kaj klopoda…*

(譯) いや、全くだ。子供があるぢやどうにもならん。それぢや金がかゝつて大變な骨だからな。

(ii) *Tio estis viro, havanta la agon de ĉirkaŭ dudek tri jaroj, peneme vestita, kun frizitaj haroj kaj glatigitaj lipharetoj.*

(譯) それは二十三四のひごくめかしな男で、髪を縮らせ、口髭を綺麗に刈込んでゐた。

以上二つの例によつて見るに、*klopoda* は骨が折れて厄介だと云ふ氣持、*peneme* はおめかしに苦心慘憺と云ふ氣持になります。

これで Marta の部は終へることに致します。唯同書中に現はれた例外的用法——少々さも私一個の考へとしては——: *kelke de minutoj* (p. 11) *morto per malsato* (p. 40) に就いては、私も多少意見を持つて居りますが紙上に發表する確心を持ちませんので、讀者の御教示に待ち、改めて發表致し度いと存じます。(誤植でないを假定する) 尙各用例に關する私の解釋に失當な箇所がありましたら御指摘下さいませ。

終りに臨んで私が引用しました各用例に日本譯を附ける事に就き、清見陸郎氏がその名譯を貸與下さつた事を厚くお禮申します。

エスペラント初級講座

【第六講】

守
則

- (1) 最初から本文の譯讀を試みるこゝ。但、極く初歩の方々は先づ譯文によつて内容をつかむのもよろしい。
(2) 單語、語法の不審は番號により單語、語法の欄を参照し更に譯文によつて全部としての意味を明かにすること。

Dio de Dormo—Mardo—

Plej¹ belaj fiŝoj kun arĝentaj kaj oraj skvamoj² naĝis post³ la boato; de tempo al tempo⁴ ili elsaltis⁵ super la akvon, kiu plaŭdiĝis⁶ kaj birdoj, ruĝaj kaj bluaj, malgrandaj kaj grandaj, fluge sekvis⁷ en du longaj vicoj,⁸ la kuloj⁹ dancis kaj majskaraboj¹⁰ murmuris¹¹ “bum, bum!” Ĉiuj volis sekvi Hjalmaron, kaj ĉiu havis ian historion por rakonti.

Certe tio estis ŝipveturado¹² tia, kia ĝi devas esti!¹³ Jen la arbaroj estis densaj¹⁴ kaj mallumaj, jen ili estis kiel plej bela parko kun sunlumo kaj floroj, kaj pretere¹⁵ oni vidis grandajn kastelojn el vitro¹⁶ kaj marmoro.¹⁷ Sur la balkonoj staris reĝidinoj,¹⁸ kaj ĉiuj ili estis malgrandaj knabinoj, kiujn Hjalmar tre bone konis, ĉar li jam antaŭe ludis kun ili. Ili etendis¹⁹ la manon, kaj ĉiu el ili antaŭtenis²⁰ al li plej ĉarman sukeraĵon,²¹ kiun nur povas vendi ia kukistino,²² kaj Hjalmar ĉe la preterveturado²³ kaptis unu finon de la sukeraĵo kaj la reĝidino tenis forte, tiel ke²⁴ ĉiu el ambaŭ²⁵ ricevis unu parton, ŝi la malpli grandan, Hjalmar la pli grandan. Antaŭ ĉiu kastelo malgrandaj reĝidoj staras garde.²⁶ Ili tenis ŝultre²⁷ orajn sabrojn kaj pluvigis²⁸ sekvinberojn²⁹ kaj stanajn³⁰ soldatojn. Tio estis veraj reĝidoj!

Jen³¹ Hjalmar ŝipveturis tra arbaroj, jen rekte tra grandaj salonoj aŭ meze tra urbo. Li traveturis ankaŭ tiun urbon, en kiu loĝis lia vartistino,³² la bona knabino, kiu portadis lin, kiam li estis tute malgranda knabo kaj kiu lin tiel³³ amis. Ŝi faris kapsignojn³⁴ kaj kantis la ĉarman versaĵon, kiun ŝi mem verkis kaj sendis al Hjalmar:

Tre ofte pensas mi pri vi,
Infano ĉarma kaj amata!
Tre ofte vin ja kisis mi
Sur buŝo, vango delikata!
El via buŝ' l' unua vort'
Ĝi mian tuŝis ja orelon.³⁵
Vin venu Di'! Al mi la sort'
Forravis mian luman stelon.³⁶

Kaj ĉiuj birdoj kunkantis,³⁷ la floroj dancis sur siaj trunketoj,³⁸ kaj la maljunaj arboj balancis³⁹ la kapojn, kvazaŭ la dio de dormo ankaŭ al ili rakontus historiojn.

眠りの神—火曜日—

銀色や金色をした鱗の何とも言ひ様の無い美しい魚がボートの後から泳いでゐました。そして時々その魚が水から跳り上つて、水がはねかへりました。赤や青の色をした小さな鳥や大きな鳥が二つの長い列を作つて後から飛んで來ます。蛸は踊り黄金蟲はブーンブーンさうなる。皆んながヤルマールの後について來たがつてゐました。そしてめいめいが何か知らん話を持つてゐました。

それこそ本當にそうもあらうと思はれる程(面白い)(tia, kia ĝi devas esti) 船路でした。森が茂つて暗いかと思へば、日光と花とで充ちた、世にも美しい公園となつてゐる、そして傍にはガラスや大理石で出来た大きなお城があります。その露臺の上には王女達が立つてゐました。その王女達と云ふのは皆小さな女の子で、ヤルマールは以前に遊んだ事があるのでよく知つてゐました。王女達は手を差し出しました。そしてめいめいが特別な菓子賣女でなければ賣つてゐない様な(或種の菓子賣のみが賣り得る)美しい砂糖菓子を差し出してゐました。ヤルマールは通りかゝり乍らその砂糖菓子の端を掴みました。すると王女の方でも強く持つてゐるので、二人がそれぞれその一部分宛を取る事になりました、王女は小さな方を、ヤルマールは大きな方を。お城の前にはこれにもこれにも小さな王子が番をして立つて居りました。王子達は黄金のサーベルを肩に擔いで、干葡萄や錫の兵隊を雨と降させます。これこそ本當の王子達でした。

時にヤルマールは森の間に舟を走らせ、又時には大きな館の間を真直に通り過ぎたり町の最中を通り過ぎたりしたこともありました。ヤルマールは又自分の乳母が住つてゐた町をも通り過ぎました。其乳母と云ふのは氣立のよい女で、ヤルマールが未だ本當に小さな子供だつた時よく彼を抱いて、大變可愛がつて呉れたのです。乳母は點頭いてヤルマールに送つて寄こした自作の可愛い歌を歌ひました。

幾度か幾度か妾は坊やの事を考へます。

可愛い、いさしいお坊ちゃん。

幾度か幾度か妾は坊やに接唇けしました。

お口と言はず、柔かいその頬と言はずに。

お口を漏れた最初の言葉は

本當に妾の耳にふれました。

幸あれよ坊やの身の上に。

運命は私から明るい星を

奪つてしまひました。

そして鳥と云ふ鳥は皆一緒になつて歌ひました。花は莖の上で踊り、老木たちもその頭をゆすりました。それは丁度眠りの神がこんなものたちにも話をして聞かせたさでもいふ様に。

【単語と語法】

1. Plej 此上もなく、最上に。 2. skvamo 鱗。 3. naĝis post la boato post は後方でと云ふ位置を示す前置詞であるから、de post (後方から)と云ふ場合とは違つてゐるが、日本語に譯すると「後から」の意になる。 4. de tempo al tempo 時々。 5. el'salti …から飛び出す。 6. plaŭd'igi 水がハネ返る。 7. fluge sekvi 飛んで後を追つて来る。 8. vico 列。 9. kulo 蚶。 10. maj'skarabo 黄金蟲。 11. murmuri つぶやく、口の中でモグモグ言ふ。 12. ŝip'vetur'ado 航海。 13. tia, kia ĝi devas esti. それが當然そうなければならぬ様な、そうもあらうと思はれる様な。 14. densa 隙間もなく茂つた。 15. pretere 傍に。 16. kastelojn el vitro ガラスで出来たお城。 17. marmoro 大理石。 18. reĝ'id'ino 王女。 19. etendi 差し延べる、擴げる。 20. antaŭ'teni 前方で支へてゐる。 21. suker'aĵo 砂糖菓子。 22. ,kiun nur povas vendi ia kukistino. 或る菓子賣だけが賣つてゐる珍しい、と云ふ程の意。 23. ĉe la preter'vetur'ado 傍を航行してゆく時に。 24. tiel ke 従つて… 例 La kom-

patinda knabino ploradis en la daŭro de tuta nokto, tiel ke ŝi elĉerpis siajn larmojn. 可愛相な少女は一晩中泣きつづけたので、涙もかれてしまつた。 25. ĉiu el ambaŭ 二人の中の共々が。 26. stari garde 番をして立つてゐる。 27. ŝultre 肩に。 28. pluvigi 雨を降らせる。 29. sek'vinbero 干葡萄。 30. stana 錫の。 31. jen ~ jen. 茲では場面の展開する状態を表し、或時は森の中を、或時は街の中を、と云ふ氣持。 32. vart'istino 守り。 33. tiel, tiel は普通、あれ程、それ程と云ふ風に、他のものの比較關係を示すのに用ひますが、時には單獨に用ひて、tre と略々同様の意味を示す事がある。 34. kap'signo 肯首。 35. ĝi mian tuŝis ja oreton ~ ĝi (vorto) ja tuŝis mian oreton. 36. Al mi la sort' forravis mian luman stelon. ~ la sorto forravis al mi mian luman stelon. 37. kunkantis 共に歌ふ。 kun を他の言葉に冠して用ふ時には大抵、皆が心を合せて一定方向に向ふ氣持が出ます。例、kunlabori, kunsenti 等。 38. trunketo 莖。 39. balanci 揺る。

第三講

[Anoncisto] J-E-I, J-E-I。こちらは日本エスペラント學會中央放送局であります。これからエス語講座第三講が始ります。

[Kursgvidanto] えゝ、今晚から兩三回に亘つて我々が少年時代に好んで読みふけたロビンソン・クルーソーの漂浪奇譚の一部を御紹介致します。御存知の通り Robinsono Kruso は英國の作家 Daniel Defoe の作品の中で最も人口に膾炙せる一つで新発見の國にあこがれをもつた R. Kruso とよぶ一少年が親の許をぬけだして某船長にたのみそのボーイとして乗船してアメリカへ出かける途中乗船が難破して彼一人名もしられぬ離れ小島に到着してそこで様々な原始人的孤獨生活を営むことがしるされたものであることは皆様の御承知の事と存じます。

本夕こゝに御講義いたします teksto は Robinson Kruso の英語原本を或和蘭の作家が少年少女の読み物として和蘭語に抄譯したものを同國エスペラント界にその人ありとしられた Bulthuis 氏がエス譯したものです。

扱今よむ所は Robinsono 少年が或ブラジル行の船の船長にたのんで乗船させてもらつて出帆した時から始まつてゐます。

Unu tagon enhaveniĝis portugala ŝipo, kiu estis vojaĝanta al Brazilo.—“Al Brazilo! la lando, kie oni bezonis nur sin kurbigi por kapti oron, tien!” parolis Robinsono al si mem. Li adiaŭis la anglan ŝipestron; kaj jen li iris rekte al la orlando.

【譯】 一日ブラジルへむけ旅行中のポルトガル船が入港致しました。『ブラジルへ(ゆこう)! あの一寸身體をまげるだけで黄金を手に入れることのできるさういふ國。そこへ(ゆこう)。』とロビンソンは獨り言申しました。彼は早速英人船長に別れをつけてまつすぐにかの黄金國さしてゆきました。

【註】 unu tagon=en unu tago 一日、或日。

en'haven'igi 入港する。sin kurb'igi 身體をまげる事。sin klini (身體をかゞめる事)と同じわけです。diri al si mem は自分自身に云ふ意故即ち獨り言を云ふ事です。ŝip'estro 船長。Brazilo ブラジル國は當時の歐洲人には黄金が道端におちてゐる様な黄金國(or'lando)だと思はれてゐたのです。R. Kruso は英人船長に別れその葡萄牙船に便乗した。

Multajn sinsekvantajn tagojn la vojaĝo estis prospera. Tamen oni ne estis malproksime de Brazilo, kiam subite eksplodis terura uragano, kiu daŭris ses tagojn. La ŝipo tiel deflankiĝis de sia irado, ke la direktisto ne sciis, kie ili estas; eble en Karabia Maro, sed tion li ne povis kun certeco diri.

【譯】 幾日も幾日も船旅は至極順調でありました。併し俄かにおそろしい暴風雨がおこつた——それは六日間もつゞきました——時はブラジルからそんなに遠くはなれてはゐなかつた様でした。その時船はその進路から横道へそれてしまつて水先案内人さへどうさう自分等が何處に居るのか判らなくなりました。無論多分カラビヤ海におつたんでせうが併し彼(=direktisto)はそれを確信を以て云ふことはできませんでした。

【註】 multajn sin'sekv'ant'ajn tagojn=dum multaj.... sinseki は連續してゐること、(sinseki unu la alian の意故)。それで multaj.... は連續した澤山の日故幾日も幾日もと譯してなきました。oni ne estis mal'proksim'e de Brazilo は Brazilo から(de) 遠くに離れてゐなかつた意故つまりブラジルに近づいてゐた事を意味する。eksplodi は爆發する事。tiel..., ke ~ = tre..., kaj tial~. de'flank'igi から(de)脇(flanko)へそれること。direkt'isto は船を direkto する人。

En la mateno de la sepa tago la maristo en la observejo ekvidis landon. Kiel ili ĉiuj ĝojis! Sed en la sama tempo la ĝojo ŝanĝiĝis en malĝojon. La ŝipo renkontis ŝtonegon kaj kunpuŝiĝinte kun ĝi restis sidanta senmove. La ondoj ruliĝis per tia forteco trans la ferdekon, ke ĉiuj forkuris en la kajuton por ne esti ĵetitaj en la maron. Jen iu ekkriis: “La ŝipo rompiĝis!” Tuj boato estis metita en la maron. La ŝanco savi la vivon estis tamen malgranda. Kun streĉitaj fortoj de ĉiuj oni batalis kontraŭ la furiozaj ondegoj.

【譯】 七日目の朝觀望臺の水夫が陸地を見ました。皆がごんなに喜んだ事でせう。併し同じ瞬間に喜びが悲しみに轉じました。それは船が岩石にぶちあたつて動かなくなつた事です。波は大變な力で甲板の上を越えてながれます。それで誰しも皆海の中へのみこまれない様にさ船室へ逃げこみました。誰かが『船がこわれた』と叫びました。すぐさまボートが海に下されました。命がたascarさといふ望みは小さうございます。皆一杯の力をだし荒れ狂ふ大波とたたかひました。

【註】 observ'ej'o 四方を展望する所。ĝojo ŝanĝ'iĝis en malĝojon よろこびがかなしみ(en...n)に變はる。la ŝipo renkontis (出會す) ŝton'eg'on kaj kun'puŝ'iĝ'int'e kun ĝi (=ŝtonego) restis sid'ant'a sen'move (不動) は直譯すれば船が大石に出會してそれとぶつかり(おしあふ)あつてそのまゝ動かぬ様になつた意。(動かずに坐つたまゝ留まる)。rul'iĝi こるがる。tia... ke~ = treega... kaj tial~。esti ĵet'it'a なげこまれる。la ŝanco savi la vivon... 生命を救ふといふ運(好機)は甚だ小さいの意。kun streĉ'it'aj fortoj... 皆の緊張した力で。

Ĉio estis vana. Alta ondo alproksimiĝis, sin ĵetis trans kaj en la boaton, kaj—boato kun maristoj malaperis en la profundaĵon. — Ĉiuj dronis, esceptinte Robinsonon. Granda ondo levis lin kaj ĵetis sur la marbordon. Senkonscie li kuŝis tie. Rekonsciente kaj malfermante la okulojn li vidis plu nenion de la ŝipo de la boato kaj de siaj kunuloj. Li estis tute sola. Senvole li genufleksis kaj danki Dion pro sia mirinda saviĝo.

【譯】 すべては無駄でした。高い波が近づいて来てボートの上や中へぶつかりました。——そしてボートは船員達をのせたまま、海中深く消えてしまひました。——ロビンソンを除いて皆の者は溺死してしまひました。大きな波が彼をほうりあげて海岸へなげだしました。彼はそこで氣を失つて横つてゐました。意識を恢復して眼をひらいた時彼はもはや船やボートや同僚達の片影すらみませんでした。彼は全くの獨りぼつちでした。何の氣なしに彼は膝まづいて神にむかつて自分が不思議にたすかつた事を感謝しました。

【註】 sin ĵetis 自分自身を投げる、さびかる。mar'isto 海員、水夫。profund'ajo 深處こゝでは海中深くへの意。escept'inte を除いて。sen'konscie 意識がなく。re'konsci'ante。li vidis plu nenion de la ŝipo, de... 直譯すれば船からの、ボートからの、同僚からの何物もみないといふ事でつまり船の破片もボートの破片も同僚の片影もみない。sen'vole 意志なくして。genu'fleks'i ひざまづく。sav'igo 救はれた事。danki ~n pro... = danki ~n por...。

今晚は時間もございませんからこれで講義を終ります。

[Anoncisto] 吉野先生の放送エスベラント講座は終わりました。J-E-I。J-E-I。

EL MIA LERNEJA VIVO

註譯『私の學校時代』

〔其 二〕

森 露 夫

Post kelka tempo instruisto demandis al Lapin: „Ĉu vi ne komprenas, ke via demando estas malsaĝa demando?“ Lapin ne povis ankoraŭ kompreni kaj li devis stari, ĝis kiam li estis kompreninta la malsaĝecon de sia demando. Nur post duonhoro Lapin komprenis sian malsaĝecon kaj estis permesita sidiĝi.

暫くすると (Post kelka tempo) 教師はラピンにききました: 『お前の質問は馬鹿な質問だと云ふことがわからんのか』。ラピンはまだわかり得ないのでした。そして自分の質問が愚であること (mal'saĝ'econ) がわかるまで立つて居らねばなりません。やつと半時間 (du'on'horo) たつてから (post) ラピンは自分が愚であつた事がわかつて坐る (sidiĝi) ことをゆるされました。

{kelka tempo 暫時 (時の量)

{kelkaj horoj 數時間 (時間の數)

{multa mono 澤山な金銭 (量)

{multaj moneroj 多くの貨幣 (數)

tempo 時間, 時 (トキ), mono 金銭等は無定形の物質名詞, 即ち量であつて, それ自體を數で數へることが出來ぬものである。即ちこう云ふ名詞は複數にならない。horo 時 (ジ), monero 貨幣は定形のある個體を表はす普通名詞で, unu horo, du horoj, tri moneroj など數へることが出来る。こう云ふ名詞に kelka, multa, mal-multa 等がつけば必然的に複數となるのである。

{Mi atendos lin, ĝis (kiam) li revenos.

彼が歸つて來る迄待ちませう。

{Li foriris antaŭ ol li revenis.

彼が歸つて來ない内に (歸るよりも前に) 彼は歸つてゆきました。

{Li foriris post kiam li revenis.

彼が歸つて來てから (歸つて來た後に) 彼は歸つてゆきました。

ĝis は前置詞としても亦接續詞としても用ひられる, 即ち ĝis kiam の kiam はなくてもよい。Antaŭ kiam は四綴になつてしつこい故 antaŭ ol の方が多く用ひられる。

{Li donis al mi nur unu dolaron.

たつた一ドルしかくれませんでした。

{Ŝi nur ploris.

泣いてばかり居た (只泣くより外はしなかつた)。

{Ni atingos tien nur post unu horo.

一時間しなくては着きません (やつと一時間してから着く)。

Post la leciono mi demandis al Lapin, en kio konsistas la malsaĝeco de lia demando, li diris, ke li ne scias.

Mi redemandis: „Sed vi diris, ke vi la malsaĝecon komprenis?“ „Mi komprenis, ke estas malsaĝe stari kaj esti punita pro ia ajn demando,“ respondis li.

課業がすんでから私はラピンに: 彼の質問が馬鹿げてゐたと云ふのはどう云ふ點にある (en kio konsistas) のかと尋ねますと, 彼は知らんと答へました。

私はそこでまた尋ねました (re'demandis): 『だれぞ君は馬鹿だと云ふ事がわかつたと云つたぢやないか』。『僕は立つてゐることが馬鹿だし, どんな質問にしるそのために (pro ia ajn demando) 罰せられるのが馬鹿だつてことがわかつたのだ』と云ふ彼の返事。

{kurso (學校や講習の全) 課程

Li finis la kurson de la liceo.

彼は中學を卒業した。

{leciono (科業の) 一課。

{Nia celo konsistas el du aferoj: idealo kaj lingvo.

吾々の目的は理想及び言語と云ふ二つの事柄から成つてゐる (成立)

Nia idealo konsistas en justeco inter gentoj.
 吾々の理想は民族間の正義に在り (正義に存す) (存立)

La instruisto diris al ni, ke homoj estas dividitaj en la rasoj, la blanka, flava, nigra k.t.p. La plej civilizita kaj plej progresema raso estas la blanka, la malplej civilizitaj estas la nigra kaj la ruĝa.

先生は吾々に申しましたには人は白色、黄色、黒色、等 (k. t. p. = kaj tiel plu) の人種に分たれてゐる。最も文明 (civilizita) で最も進歩的 (progresema) な人種は白色 (人種) で、最も非文明なのは黒色及び赤色人種である。

{ raso 人種 (アリアン人種, モンゴリヤ人種 など)
 { gento 民族 (即ち raso の小別, 日本民族, ドイツ民族など)
 { civilizati 文明にする, 開化さす。
 { civilizita 文明な, 開化な。
 { vesti (着物を) きせる。
 { vestita (着物を) 着けた。

此の如く日本語では自動的に云ふ所を他動の受動にして云ふことがある:

Mi estis surprizita = surpriziĝis.

びっくりした (びっくりさせられた)。

Mi estis ĉagrenita = ĉagreniĝis.

僕は非観した, 困った。

Lapin ekstaris kaj demandis: „Ĉu ni estas la plej civilizitaj kaj progresemaj pro nia blanka koloro?“ Alia knabo stariĝis kaj demandis: „Kiam dum somero oni nigriĝas pro la suno, ĉu oni ankaŭ maleciviliziĝas pro tio? La instruisto diris, ke ambaŭ demandoj estas malsaĝaj, kaj Lapin kaj la alia knabo devis stariĝis kiam ili estis komprenintaj sian malsaĝecon.

ラビンは立ち上つて尋ねました: 『吾々が文明で進歩的であるのは吾々の色が白いせいなのですか』 も一人の (alia) 子供が立ち上つて質問しました: 『夏の間 お天道様のために黒くなります (nigriĝas) が (時には) そのため

に矢張り野蠻になるのでせうか』 先生は質問は両方共馬鹿であると申しました。そしてラビンさも一人の子は自分の馬鹿さがわかるまで立つて居らねばなりませんでした。

{ stari 立つて居る (状態)
 { ekstari=sin starigi=stariĝi 立つ, 立ち上る (動作)

{ sidi 坐つて居る (状態)
 { eksidi=sin sidigi=sidiĝi 坐る (動作)

{ Karlo estas liceano. Tiu knabo estas tre saĝa.

{ Karlo kaj Frederiko estas liceanoj.
 { Ambaŭ knaboj estas tre saĝaj.

Tiu, ambaŭ 等は前のものを受けて云ふのであるから自然特定, 従つて tiu la knabo, ambaŭ la knaboj と la を入れる必要はない。然し ambaŭ の方は副詞的助辭であるので la を入れる人もある。(Zamenhof は入れるのは重複であると云つてゐる)。

作文練習

1. 私は三歳の時父を失ひました。

Mi perdis la patron, kiam mi estis tri-jara (又は kiam mi havis tri jarojn. 又は en mia aĝo de tri jaroj).

2. 私は坐り心地のよい安樂椅子に腰をかけた。

Mi sidis en komforta brakseĝo.

3. 彼の家族は皆たつしやです。

Lia tuta familio estas sana (又は Ĉiuj liaj familianoj estas sanaj).

4. 彼は両親の處へ行つて夏休暇を送ると申ししてゐます。

Li diris, ke li iros al la gepatra hejmo por pasigi sian libertempon.

5. 此の子は明年卒業です。

Tiu ĉi knabo finos la kurson de la lernejo en la venonta jaro.

6. 彼は英語しか話せない。

Li povas paroli nur angle.

7. 成効の秘訣は根氣にあり。

La sekreto de sukceso konsistas en persistado.

活躍のベルリンへ

(エスペラント旅日記)

小坂 猶二

五月九日(月)。朝、長谷川と Grenkamp 方へゆき、三人で約束した十三時半 Th. Cart 教授にあひにゆく。吾輩を言語委員に引張り込みたいとの事だがこさわり他の人を推薦してまけてもらふことにする。しばらく話して再び Grenkamp のホテルにかへり、先生の持つて居る古本をあさる。三人で日本人會へ行つて日本食をさる。夕、Laborista Borso で開かれる Laborista Grupo の例會へゆく。Matematika Iniciilo の發明者で著者である I. Camescasse 老が講演をやる。物事が近年 rapideco によつてなされる様になつて來たのは損である。交通機關や機械等が皆高速度になつて來たのは機械的經濟的に大損であると言ふ趣旨である。だいふ異論が出て散會後街上で大議論をやつて人だかりがした位。例によつて吾輩も一席しやべらされる。了つて Place de Republic のカフェーへ六七人行つて飲む。フランスの一般エスペラント運動は沈滞、立つ得はずと云つた観があるが労働者のエス會だけは他國同様中々活氣があり盛んである。近く Lyon を中心にして起つた學生エスペラント聯盟と相ひまつて、將來フランスのエスペラント運動のタイ勢を挽回するのは労働者と學生の手にあると云つてよい。世界大戰前エスペラント運動の世界的中心、華かな第十回萬國大會(遂に開かれ得なかつたが)の主催國フランスの意氣今いづこにかあると云ひたくなる。まことにあはれな現状と云ふべしだ。

十日。二十一時 Cafe Cluny で Rodolf 及び Jougnat と落ち合ひフランス語の發音のおけいこ。

十一日。朝十一時十五分 Grenkamp の下宿へゆきかけたら途中で出遇ふ。Eisberg の事務所(Radio-Revuo を出してゐる書店)へゆく。Radio Revuo も發刊以來忽ち會員七百を得たのだが一年以上も休刊の有様。Ili ne volas labori と云ふ評。お鉢がまわつて Eisberg が押しつけられて閉口してゐる。十二時十五分パリーエス會頭 G. Warnier から招待の Rotary Club の晝餐會へゆく(Bulvarde Haussmann にある一流のホテル Commodore) 御承知の如くブルジョア式の會で招待を被つ

たエスペランチストは Houbar(佛), Djudjeff(ブルガリア), Kaur(エストニア), Major(ハンガリー), Arnould(ルーマニア), Solsona(カタルナ), Aisberg(ロシア), Grenkamp(ポーランド), 西村及び吾輩(日本)の面々で轡をならべてしやべらさせられ、かなり宣傳効果を収めた。Warnier は會頭だけあつてエスペラントは中々上手、且つソロボンヌ大學のエス會(巴里エス會の集會)後の Cafe Cluny でのも場合はよく皆の勘定を一人で出す。中々交際上手だから會頭には適任者であらう。

夕、ランテイー方にゆき長谷川の歸るのを待ちうけ、ランテイーとリムーザン嬢を中華飯店の支那食に招待する。

十三日。長谷川君病氣の同僚をマルセイユに送るために立つ。そのまゝ約二ヶ月西班牙ポルトガルをうろつきそのまゝ例により誰にも音信せず Lanty などあきれかへる。

十六日。夕前約により Laborista Borso の労働者エスペラント會へゆき『日本の労働者』と云ふ講演をやる。甚だ kompetenta でないが過去より現状に及んで一時間あまりしやべつてのける。

十七日。常盤へ Warnier 夫妻を招待して日本食を馳走する。London の鐵道省事務所から London の Modern Export と云ふ雑誌が日本國有鐵道特別號を出すに就て本省へ申出た所材料がとぎれた故それを英譯して記事をこれ上げてくれと云ふ手紙が來た。二十日に行くことにする。

十八日。Grenkamp と夕食を共にし歩いて Verda Kato の會へゆく。來月一日にやると云ふ kavaredo のお芝居の稽古をやつてゐる。西村氏も來會。

二十日。巴里を立つて London へゆく。雑誌の材料が山ほど來てゐるので驚く。三ヶ月位はかゝるだらうと云ふのであるが、きらいな英國にそんなに永く居させられてはかなはないから早速役所の近所に下宿をして先づ材料の整理にさりかゝる。つゞいて眞に晝夜兼行。日曜日までも筆をとつて原稿を書く。五月がすぎ、六月もすぎ、やつと二ヶ月で完

成する。此の間エスペラントの會へもあまり顔は出せなかつた。

六月二十八日。午後、一寸のつもりで Brita Esp. Asocio に行つて Butler 氏と話しをしてゐるアメリカの Cristensen がひよつこりさその巨軀をあらはす。早くかへるつもりが五時頃まで話し込んでしまふ。Cristensen の相變のアメリカ式の茶目ぶりに久しぶりで のんびりした氣持になる。

六月三十日。瀬川重禮君來訪。本年の大會へ出られる由。

七月十日。十四時 London 發、Folkstone Boulogne 經由でパリへかへり、前の Hotel Friedland に投宿。二十一時半長谷川及び戸澤君來り久々でサンミツシエル街へゆき Cafe Soufflet で飲む。

十三日。夕 Verda Kato の會合へ行つた今日は祭日なので一日くりあげて昨日あつた由で誰も來ない。暫く飲んでゐたら労働者會の方の Buire 及び Morinstem の二少年がやつて來た。二人共大人よりも上手にエスペラントをしやべる位。一緒に Cafe Jacquemin-graff へゆき夜中すぎまで飲む。

十四日。革命紀念日で中々賑か。エトアル(凱旋門のある處)まで見物にゆく。荷片附が了り、タクシで Lanty 方へゆきスーツケース一個をあづける。長谷川は長谷川式を發揮して荷片附が了らず、ごつたがへした部屋の中へ大童になつて立つてゐる。萬一片附けが出來そうもなければ、大きな袋をもつてゐるからその中に何でもかまはず押し込むと云ふ。事體斯の如くであるが戸澤君をさそひ三人でサンミツシエルへゆき Duval で夕食。Cafe Sorbonne でビールをのむ。長谷川は先へかへり、また Cafe Soufflet へ行つて飲み、二十三時ホテルへかへる。

十五日。長谷川も無事荷物を押込んで一緒に十二時十五分 Nord 停車場發、パリへ後にして獨逸へ向ふ。パリは吾輩の父が十八の年(明治二年)に來て十年を送つた土地である。よく飲みに行つたサンミツシエル街の Cafe Sorbonne の前にはその母校 St. Louis 中學校が立つてゐる。なんとはなしになつかしい。汽車はフランス國境をすぎてベルギーを通りぬけ、二十一時四十七分獨逸の Köln 着。Hotel Ewige Lampe に投宿。

十六日。朝 U. E. A. の delegito S-ro A. Junker の處へゆく。電話を Horrem の Teo Jung 氏の處へかけてもらふ。Rhein にかゝつてゐる大鐵橋 Hohenzollen Brück を渡つてみる。十二時三十八分 Köln 發、十三時二十分 Horrem 着。Teo Jung 氏が停車場まで出迎へに來てくれる。Heroldo de Esperanto の發行印刷所であるその家へゆく。何處も同じ秋の夕暮で、世界的の不景氣がたゞり Heroldo de Esperanto の購讀者も千三百人位しかないので、週刊雜誌としては維持困難。印刷所は他の一般獨逸語の印刷も引き受けてゐるのだから、エスペラントの方は先づ損をしてやつて居る有様。Sennaculo の如き特殊機關を除いては、まだ國際的のエスペラント雜誌はやつて行けないのは明か。犠牲はなほ永く吾々エスペランチストの喜んでしのぶべき所のものである。

Teo 氏及び其弟其他と共に Horrem 村を散歩する。十九半 Horrem 發ケルンにかへる。

十七日。朝停車場前の Dom を見る。建立に六百年かゝつたと云ふとてつもない大寺院である。十時四十七分ケルン發、十九時八分ベルリンの Friedrichstrasse 停車場着。Hotel Prinz Friedrich Karl にゆき荷物を置いて、Nollendorf Platz の日本人會へ夕食をしにゆく。鐵道の太田技師が來てゐた。食後一緒に Cafe Victoria Louise へゆく。鐵道の片岡君も來てゐた。ベルリン到着のその夕、所謂ベルリンの夜を見せられたわけである。

十八日。Potsdamer Bahnhof (停車場) 内旅行案内社 Mitroeuropäische Reisebüro の Blankenheim 氏にあひにゆく。この社は獨逸に於ける Thomas Cook 會社とも云ふべきものでそこに Esperantisto の居るのは便利此の上もない。しかも氏は中々活動的なエスペランチストである。鐵道省ベルリン事務所に顔出をし、十六時 Esperanto-Unuigo Berlin の會頭 Julius Glück 氏方へゆく。近所を案内してくれる。大商店があり夜の街であつた Friedrich 街の賑が近頃は此の附近にうつつて市の中心地になりつゝある。一度歸つて同氏と同棲してゐる F-ino Wirt 及び來合はせてゐた S-ro E. Dauge をもさそつて日本人會へ日本食に招待する。Glück 氏は何れあそで述べるがベルリンに於ける Esperanto 運動の一方の旗頭で全くエスペラントに獻身してゐる homaranismo である。

和文エス 譯添削欄

〔第六回〕

編輯部

問 1. 彼は狂氣の様に彼女を打擲した。

答 1. Li batis ŝin freneze.

furioze を用いた人がありましたがそれでは狂氣の様にさういふ意味にはなりません。kiel frenezulo ならば同じ意味になります。

問 2. 彼があんなに夭折しようとは思はなかつた。

答 2. Neniam mi pensis, ke li mortus tiel juna.

tiel juna は estante tiel juna の意味です。en tia juneco を用いた人が大分ありました。それもまちがひではないが tiel juna をおすすめします。ke li mortis (又は mortos) と書いた人が多数でしたがこれは想像ですから假定法を用ふべきです。思はなかつた…を mi ne pensis 又は mi ne supozis とした人がありましたが文全體の意味から彼があんなに若くて死なうとは意外であつたさういふ驚きと嘆息の氣持が見出されますから Neniam と強くいつた方がいゝと思ひます。

問 3. 吾々は人類の爲に (pro la bono de) エスペラントを普及させう。

答 3. Ni disvastigu Esperanton pro la bono de la homaro.

吾々のさあつたのは誤植でした。しかし吾々の人類などゝ變な日本語になつてゐても拘泥しないがよいのです。正しい意味を一旦頭に入れてからエスペラントで再現することに心がけて下さい。pro la bono. さわざわざ例示してあるのに por を用いた人が幾人もありました。pro でも、por でもよろしい。但し、こんな場合の pro と por の相違は非常に delikata で人によつていろいろ意見がありませう。簡単に説明することは不可能です。たゞどちらでもいいと思つて、でたらめに使はない様に注意して下さい。Zamenhof の用例を二三あげて置きます。

por. ★ Fratoj devis helpi unu la alian por la feliĉo kaj la gloro de sia familio.

★ La mondo devas esti organizita por la paco anstataŭ por la milito.

pro. ★ Mi venis pro serioza afero.

★ Ĉu mi faris tion ĉi pro ia praktika utileco?

★ Multaj milionoj da homoj malfacile batalas pro libereco, pro la rajtoj de homo.

問 4. 彼は全生涯をエスペラント運動の爲めに捧げた。

答 4. Li oferis sian tutan vivon al la esperanta movado.

(Li oferis sin al la esperanta movado en la daŭro de la tuta vivo.)

第三問に於て日本語の爲めには por さも pro さもされる所から迷惑を感じましたがこゝでも爲めにの爲めにまちがひが起つてゐます。al とすべき所に por を用いた人が大多數でした。oferi するには相手がなければなりません。相手が la esperanta movado だとすれば al esperanta movado としなければなりません。en la daŭro de … は Zamenhof がよく使つてゐます。こんな場合には使つていゝでせう。

問 5. 貴方の御盡力のお蔭で吾々は成功しました。

答 5. Dank' al via klopodo ni sukcesis.

日本語のお蔭でさういふ場合にはいつも dank' al と思つて間違ひないやうです。お蔭で失敗したよさういふ場合でも per では少し意味がちがひます。per は手段にしてさか介してさかいふ意味です。單に sukcesis といはないで povis sukcesi とした方がおかげでさういふ語に對してふさわしく又丁寧でもあります。

問 6. それは人間の力がよく及ぶ所ではありません。

答 6. Tio estas super la homa kapablo.

super は上の方に(離れて)といふ意味の語ですからこれで人間の力が及ばないといふことになるのです。ekster でも悪くはありませんが人間の力を超越してゐるといふ意味で super を用ひた方がよいと思ひます。Kabe は Tio estas super ĉiuj homaj fortoj と書いてゐます。ekster を用ふる場合は ĝi estis ekster mia supozo (それには想像が及ばなかつた) Tio estas ekster mia povo (そんな事は私には出来ない)

問 7. 實際の所貴方は賛成なのですか不賛成なのですか。

答 7. Ĉu vi estas por aŭ kontraŭ, efektive?

(Ĉu vi aprobas, aŭ ne, efektive?) por は單に … に對してといふだけでなくそれに對して有利に或動作がなされる場合に用ふるので賛成といふ意味になり kontraŭ は丁度その反對で不賛成といふことになります。實際の所には大分皆さん困られた様ですが efektive でいゝと思ひます。それも問ひのつけ加へとして最後に持つて行つた方がいゝと思ひます日本語の賛成といふ語はいろんな場合に用ひられるので aprobi に當る事もあらうし kon-senti に當ることもありませう。

問 8. 私は毎日五頁づゝ本を読みます。

答 8. Mi legas libron po kvin paĝoj ĉiutage.

これは概してよく出来てゐました。讀むを legadas とした人がありましたが legas は決して瞬間的の動作を表す語ではなく何時間つゞけて讀んでも又毎日くりかへして讀んでも legas で結構です -ad- を入れる必要はありません。po kvin paĝojn とした人がありました。前置詞の後に目的格を用ひるのはそれによつて移動の方向を表す場合だけです。例へば en la ĉambro (室の中へ) sur la tablo (卓子の上へ) それから libro に冠詞をつけた人がありましたが問の“本”は特定の本ではありませんから冠詞を使てはいけません。

問 9. 假令失敗はしてもやるだけはやつて見よう。

答 9. Eĉ se mi malsukcesus, mi provu laŭ mia povo.

eĉ se を用ひた人が一人二人しかなかつたのは残念でした。假令といふ場合にはいつでも eĉ se を用ひてさしつかへありません。やるだけはがよほど頭をなやましたと見えて譯がさまざまでした。iel, ĉiel, kiel eble, per miaj ĉiuj fortoj, kiom mi povas 等々、いづれもまちがひさはいへません。やつて見ようは決心を示すものとして provu と命令法を用ひた方がよいと思ひます。

問10. 私はロンドンへ行く毎に彼に出會しました。

答10. Mi renkontis lin ĉiufoje, kiam mi iris Londonon.

ĉiufoje の代りに ĉiun fojon を用ひてもいゝのですしかし …lin ĉiun fojon といふ様に目的格の語がいくつも重なる様な場合には出来ればそれをさけた方がいゝと思ひます。ĉiufoje とはなして書いた人がありましたが ĉiufoje は形容詞、foje は副詞ですからはなしては意味をなしません。又 komo をうたないで書き流しにしてゐる人がありますがわるいくせです。句讀點は各國語に用ひてゐる通りに用ひてさしつかへないといふことになつてゐますが日本人にはあてはまらない様です。エス語の本を讀む際に氣をつけて要領をのみこむことが肝要です。

三月 號 課 題

1. 火がなくてはわらでも燃えない。
2. 私の友達の中にはそんな男はゐません。
3. マリは鳥のやうに高く飛びました。
4. 本を首びきで一晩中坐つてゐた。
5. その役は私が引受けませう。
6. 前も後ろもはてしなき青海原。
7. 零下30度。
8. 私はそれをこなごなに打ちくだいた。
9. 彼女は私から數歩の所に立つてゐました。
10. 出發する前に彼は何かもうりばひました。

他 山 の 石

日本語のこう云ふ言ひ表はし方は 에스ペラントで何と云ふだろう……と會話なり書き物なりに當つて困惑することはありがちのこと。然しこれは平素本を読むときによく注意してこれはと思ふ文句を覚えて置けば利用が出来るものである。その點から見ても所謂直譯なるものは有害禁物。本誌の註譯物などはその心して讀まれんことを希望する。

今毎水曜日午後七時からの學會の例會でザメシホフ博士譯の *Georgo Dandin* を讀んでゐる。今見本に同書の文句中から實地應用の例をひく。

1. ぬかるみ道を歩くのはやりきれない。

Marsádo en kota vetero (aŭ sur kota vojo) estas malbona afero!

[原文 p. 5 本文 1 l.] *Ha, nobela edzino estas malbona afero!* なほ一例

『やきもち女房はかなはない』

Malbona afero estas ĵaluza edzino!

[註] *afero* を入れるさいかにも話が大きさに聞えるのである。

『思はぬ金が手に入るたあ 棚からぼたもちだ』

Estas bona afero ricevi tute neatenditan monon.

『四方八方からやつつけられるのは目に見えた話だ』

Certa afero, ke vi ricevos piedbatojn de ĉiuj flankoj.

2. 彼が失敗したのは世人へのよいみせしめだ。

Lia malsukceso estas instrua leciono por ĉiuj.

[原文同頁 1. 2] *Mia edziĝo estas instrua leciono por ĉiuj kampuloj.*

『彼が失敗したのは反つて身のためだ』

Lia malsukceso estus bona leciono por li.

3. 身分不相應な生活をするもんぢやない。

Ne konduku vivon super sia stato.

[原文同行] …… *ĉiuj kampuloj, kiuj volas*

leviĝi super sian staton. 『自分をこえて成上ろうなごと思ふ田舎者は皆』[註] *sian staton* が目的になつてゐるのは『自分の分限を超して上る』と移動を示すから。上例は『身分を超した(状態の)生活』即ち超してゆく移動の意でなく、超えた位置の意故主格。

4. 考へだけはよいが……

La ideo per si mem estas bona, sed……

[原文同頁 1. 4] *La nobeleco per si mem estas bona, ……* 『高貴と云ふものはそれだけで(他のことはなくとも)よい』

『前置詞はすべてそれだけでは(他の原因なくば)主格をつければよい(主格を要求する)』

Ĉiuj prepozicioj per si mem postulas la nominativon.

5. そんな他(び)事はほつてお置きなさい。

Lasu flanko tian fremdan aferon.

[原文同頁 1. 6] *estas tre bone lasi ĝin flanko.* 『そんなものはうつちやつて置く(手にふれぬ、關らぬ)がよい』

『抛つさいて(そばに來ずに)下さい』

Lasu min sala!

『行きたきや行かせるがよい』

Lasu lin iri, se li volas.

6. 奴は僕に馬鹿を見させてうまい汁をすつてゐる。

Li ĝuas la aferon per mia kosto (aŭ kostopago).

[原文同 1. 6] *Pri tio mi fariĝis saĝa per mia propra kostopago.* 『此の事は自分でひさい目を見て(自分自身が値を拂つて)目がさめた(利口になつた)のだ』

7. 子供をそんなにむごい目にあはせるものではない。

Ne traktu la infanojn tiel kruele.

『たいそう優遇されました』

Oni traktis min tre bone.

8. あの人は故郷に残つてゐる方がよかつたのに。

Li farus (aŭ Estus al li) pli bone, se li restus (aŭ restante) en sia hejmurbo.

[原文同頁 p. 10] mi farus pli bone, se...
『あれの申込みを絶つたのはわるかつた』

Vi faris malbone, ke vi rifuzis (aŭ rifuzante) lian proponon.

9. 女の手管(てだ)。

Artifiko de l' virino.

[原文同行] ..., se mi edziĝus kun senartifika kaj bona kampulino. 『手練手管のない人のよい田舎女と結婚してゐたのなら』

10. どうやら人がけぞつたらしい。

Oni ekrimarkis la aferon, al mi ŝajnas = Al mi ŝajnas, ke oni...

[原文 p. 6, l. 14] Vi ne estas de ĉi tie (=homo de ĉi tie, ĉi tiea homo), al mi ŝajnas? 『君はこゝの土地者ではあるまいがな(そう思はれる)』

11. 手前共の主人にたのまれて参りました。

Mi venas al vi en komisio de mia mastro.

『あの方へ言傳(ことづけ)ていたゞきたいのですが』

Ĉu vi bonvolus doni al li mian komision?

12. 色目を使ふ。
fari al ŝi amajn okulojn.

[註] amajn okuletojn さしてもよい [原文同頁最下行]

13. 何かそのような事が耳にはいろうものなら猛り立つだろう。

Li diable furiozus, se io simila venus al liaj oreloj.

[註] venus al li en la orelojn さするもよし。se li aŭdus ion similan では曲がない。[原文 p. 7, l. 11]

14. 鼻がきく。

havi bonan nazon.

[p. 7, l. 29]

馬鹿面をしてゐる(ぼんやりしてゐる)。

havi longan nazon.

[p. 8, l. 20]

類例: 『他事に手出をするな』

Ne enŝovu la nazon en fremdan aferon.

『この犬はよく鼻がきく』

Tiu ĉi hundo havas tre bonan nazon.

『奴けしからんこさを企んでゐるな。ちゃんさかぎつけてゐるぞ(先見してゐる)』

Jen fripono, kion li intencas! Mi havas bonan nazon.

15. 何とか金を工面して穴をうめなきやならない。

Iel mi devas havigi al mi monon por ŝtopi la truon.

16. 奴はよいむく鳥だ。

Li estas facile trompebla koko.

[原文 p. 11, 下から5行] Mi estas trompita koko. 『馬鹿をみるのは私だ』

17. 仕末をつけてもらひたい。

Mi volas, ke vi faru ordon al la afero.

18. 君は人の噂に立つだけの事はしたのだ。

Vi donis sufiĉan kaŭzon, ke oni parolu pri vi.

『彼のうはさで持ちきりだ』

Ĉie oni parolas nur pri li.

19. 何も心配することはない。

Zorgu pri nenio.

20. 私の知つてゐる處では彼は金持でない。

Kiom mi scias, li ne estas riĉa.

—Ah—ekkriis la skribisto—tio povas stari mil jarojn, kaj mi ne tuŝos ĝin...Kun permeso de via moŝto: kian bienon oni vidas tie?...

Kaj li klinis sin tra la fenestro de la terdomo.

—Saĝaj estas viaj vortoj—diris Amon.—Ĉar tio estas bieno, kaj eĉ tre bela. Ĝi havas vastan domon, kvardek mezurojn da tero, dekelkon da brutoj kaj dek sklavojn. Se vi preferus posedi tiun bienon...

La skribisto falis al la piedoj de l' dio.

—Ĉu ekzistas—diris li—tia homo sub la suno, kiu ne preferus tritikan bukon, ol hordean?...

Aŭdinte tion, Amon diris miraklan vorton, kaj tuj ili troviĝis en la vasta bona domo.

95. 處が Amon は此の bona domo にも一つの條件をつける。それは部屋の一隅に立つて居るモスリンで被はれた立像を絶対にさはつてはいけない、若しその立像に觸はるやうなことがあつたら、すべての富はきえてしまふぞと云ふのである。書記生君はもとよりその位の條件を何とも思つては居ない。だが彼はまた更に窓外に見える granda palaco を指してそれを欲しがる。

96. Li (Amon) diris la grandan miraklan vorton, kaj ili ambaŭ kun la skribisto troviĝis en la palaco.

—Vi havas ĉi tie—diris la bona dio—manĝoĉambron, en ĝi oritaj kanapojn kaj seĝojn, inkrustitajn per diverskolora ligno. Malsupre estas kuirejo por kvin kuiristoj, provizejo, kie vi trovos ĉiajn viandojn, fiŝojn kaj kukojn, fine kelo kun plej bonaj vinoj. Vi havas ĉi tie dormoĉambron kun movebla tegmento, per kiu la sklavoj malvarmigis vin dum via dormo. Mi turnas vian atenton al la lito, kiu estas el cerda ligno kaj sin apogas sur kvin leonaj piedegoj, el arte fandita bronzo. Vi havas ĉi tie vestejon, plenan de tolaj kaj atlasaj vestoj, kaj en la kestoj vi trovos ringojn, ĉenojn kaj braceletojn...

—Kaj kio estas ĉi tio?—demandis la skribisto, montrante figuron, kovritan per vualo, brodita per oraj kaj purpuraj fadenoj.

Ĝuste tio, kion devas eviti—respondis la dio.

—Se vi tuŝos ĝin, via grandega riĉaĵo estos perdita. Kaj vere mi diris al vi, ke nemulte da similaj bienoj ekzistas en Egipto. Mi devas ankoraŭ aldoni, ke en la trezorejo kuŝas dek talentoj da oro kaj da multvaloraj ŝtonoj.

—Mia estro!...—ekkriis la skribisto.—Permesu al mi starigi sur la unua loko en ĉi tiu palaco vian oran statuon, antaŭ kiu trifoje ĉiutage mi bruligos inceson...

—Sed tion evitu!...—respondis Amon, montrante la figuron, kovritan per vualo.

—Mi devus perdi la saĝon kaj esti pli senprudenta, ol sovaĝa porko, por kiu la vino valoras tiom, kiom la elversajaĵoj—diris la skribisto.—La figulo en la vualo povas pentofari ĉi tie cent mil jarojn, kaj mi ne tuŝos ĝin, se tia estas via volo...

—Memoru, ke vi perdus ĉion!...—ekkriis la dio kaj malaperis.

97. 書記生君は一躍して宮殿に住む身になつて夢かさばかり喜んで居る。然しやがて Li tamen komencis enui en la ĉambroj, li do rigardis la ĝardenon, ĉirkaŭveturis la kampojn, parolis kun la servistoj, kiuj falis telen antaŭ li, kvankam ili estis tiel vestitaj, ke ankoraŭ hieraŭ li kun respekto kisis iliajn manojn. Sed ĉar ankaŭ tie li enuis li do revenis en la palacon, kaj rigardis sian provizejon kaj kelon, kaj la meblojn en la ĉambroj.

—Tio estas bela—diris li al si—sed pli belaj estus mebloj el pura oro, kaj vazoj el multekostaj ŝtonoj.

Liaj okuloj sin turnis senvole al la angulo, kie staris la figuro, kovrita per brodita vualo kaj—sopiris.

—Sopiru, sopiru!—pensis li—prenante parfumon, por bruligi ĝin antaŭ la statuo de Amon.

—Li estas bona dio—pensis li—kiu ŝatas la bonajn ecojn de la saĝuloj, eĉ nudpiedaj, kaj estas justa por i'i. Kiel belan riĉaĵon li donis al mi!... Vero estas, ke ankaŭ mi honoris lin, skribante dumaniere lian nomon; Amon, sur la pordo de la terdomo. Kaj kiel bele mi kalkulis al li... Pravoj estis miaj majstroj, dirante, ke la saĝo eĉ al la dioj malfermas la buŝon.

Li ekrigardis ree en la angulon. La figuro kovrita per la vualo ree eksopiris.

—Mi dezirus scii,—diris al si la skribisto—kial mia amiko Amon malpermesis al mi tuŝi ĉi tiun malgrandan objekton, kiu staras tie en la angulo? Estas vero, ke por tia riĉaĝo li havis rajton meti kondiĉojn, sed mi ne farus tion al li. Ĉar se la tuta palaco estas mia propraĵo, se mi povas uzi ĉion en ĝi, kial mi ne povus tuŝi tion?

Oni diras tiel: malpermesite estas tuŝi! Sed estas permesite vidi!

98. Li proksimiĝis al la figuro, demetis singarde la vualon, rigardis: io tre bela. Kvazaŭ bela juna knabo, sed ne knabo Tio havis longajn harojn ĝis la genuoj, delikatajn trajtojn kaj rigardon, pleanan de dolĉeco.

—Kio vi estas?—diris li al la figuro.

—Mi estas virino—respondis la figuro per tiel penetrema voĉo, ke ĝi trapikis lian koron, kiel fenicia ponardo.

—Virino?—pensis la skribisto—Pri tio mi lernis nenion en la pastra lernejo. Virino?—ripetis li.—Kaj kion vi havas ĉi tie?

—Tio estas miaj okuloj.

—Okuloj?—Kion vi povas tiaj okuloj, kiuj povas fandiĝi de plej malforta lumo?

—Miaj okuloj ne estas kreitaj, por ke mi rigardu, sed por ke vi ilin rigardu—respondis la figuro.

—Strangaj okuloj—diris al si la skribisto, pasante tra la ĉambro.

99. Li ree haltis antaŭ la figuro kaj demandis:

—Kaj kion vi havas tie?

—Tio estas mia buŝo.

—Pro dioj! vi mortos de malsato—ekkriis li—ĉar per tiel malgranda buŝo oni ne povas satmanĝi!

Ĝi ne estas kreita por manĝado—respondis la figuro—sed por ke vi kisu ĝin.

—Kisi?—ripetis la skribisto—ankaŭ tion mi ne lernis ĉe la pastroj Kaj kio estas tio?

—Tio estas miaj manetoj.

—Manetoj?—Bone, ke vi diris al mi, ke tio estas manetoj, ĉar per tiaj manetoj vi ne povus fari ion, eĉ melki ŝafinon.

—Miaj manoj ne estas por laborado.

—Por kio do?—ekmiris la skribisto, disigante ŝiajn fingrojn Por kio do estas faritaj tiel belaj manoj?—demandis la skribisto, kiun la pastroj ĉiam prenis je la nuko, kiam li estis vergota.

—Ne je la nuko, sed jen tiel

Kaj ŝi ĉirkaŭprenis lian kolon Subite ekstremis la tero, la palaco malaperis, malaperis la hundoj, ĉevaloj kaj sklavoj. La altaĵo kovrita de vinberoj fariĝis ŝtonego, la olivarboj—dornujoj, kaj la tritiko—sablo

La skribisto, kiam li rekonsciigis en la brakoj de sia amatino, komprenis, ke li estas sama mizerulo, kia li estis hieraŭ sur la strato. Sed li ne bedaŭris siajn riĉaĵojn, ĉar li havis virinon, kiu amis kaj karesis lin.

100. 此の rakonto はこれで終つて居るが Ramzes は Ne je la nuko, sed jen tiel と言ひながら Kama の首のまはりに手をやつて、きゅつさだきしめる。それから以後は讀者もまた現實の世界にひきもどされるのである。此の rakonto は Fundamenta Krestmatio の中にある “La deveno de la virino” と比べて見るに實に面白い。私はかつて “La deveno de la virino” をその内容によつて改題して「夫の由來」と題し、此の skribisto の物語を「妻の由來」と題して書いて見たことがある。一つは印度の、一つは埃及の、共に fabelo の形式をとりながら、男女の關係をなかなかうがつて居る。讀者は序に F. K. の中にある “Kiu estas la plej bona amiko de la viro?” を並讀されるならば自ら微笑を禁じ得なくなるでありませう。.....さて Dro Kabe の文章は此處に引用するまでもなく讀者の既に親しんで居られることを信するので特に此の skribisto の話を此處には出して見たのである。La Faraono は其の量に於て最大なものであり、其の内容に於ても舞臺、時代、事件共に十分我々の興味をさらへるものである。若し此本が英譯にでもなつて居るすれば、恐らくは既にさうの昔日本に紹介されて居たであらう。藤森成吉氏は清見氏譯のマルタ讀後感の中で、何故マルタは今まで日本に紹介されなかつたか、それは恐らくエス語であつたからであらうと言ふ意味のことを言つて居られるが、La Faraono についても同じことが言へると思ふ。私は海女が眞珠をさる様に、Esperantujo の海底からたくさん寶物をひき上げて見たいと思ふ。〔完〕

蜜 蜂 の 如 く 川 崎 直 一

(A) 文法や辭書は要するに原則である。眞の lingvosento に達せんとする者は、優秀な文章を熟讀して得たる實例によつて、この原則に血と肉を與えねばならぬ。否むしる幾多の實例から歸納した原則でなければそれこそ kastelo en aero だ。Ruĝa krajono を手にして我々はかの蜜蜂の如く花より花へと集めまわらねばならない。

(B) ...*La voĉo de la maljunulo estingiĝis.*
Arkadio premis lian manon.

—Kiel vi pensas, —demandis Vasilij Ivanoviĉ post mallonga silento, —ne sur la medicina kampo li ja atingos la famon, kiun vi profetas al li?

—Kompreneble, ne sur la medicina, kvankam ankaŭ tie ĉi li estos unu el la plej famaj scienculoj.

—Do sur kia kampo, Arkadio Nikolaiĉ?

—Malfacile estas diri tion nun, sed li estos fama.

—Li estos fama! —ripetis la maljunulo kaj dronis en medito. (Turgenev 原作 Kabe 譯 *Patroj kaj Filoj*, p. 150)

Figura senco の適例がこの短い會話の中に 3 もある。Kabe の文體は fidela で、變てこな、きざな esprimo が無いから、始めて讀書をしようさせられる方には最適當であらう。彼の譯書: *Interrompita Kanto*, *Bona Sinjorino*, *Fundo de l' Mizero*, 最良の讀本 *Unua Legolibro*.

(C) 文體の穩當な點にかけては Luyken も Kabe に劣らない。Kabe は tradukisto だが彼は originalisto だ。

—Nu, mi esperas, ke ni ankaŭ fariĝos bonaj amikinoj. Vi estas unu el la tre multaj infanoj, kiuj ne vizitas min. Venu tiel ofte, kiel al vi plaĉas; mi tre amas infanojn kaj ŝatas iliajn vizitojn. Ifoje mi tre agrable okupas la tempon per bablado, kantado aŭ, kiam ĉeestas nur knabinoj, per kudrado, dum kiu mi ofte diras al ili belan rakonton. Tiel ni pasigis jam multajn feliĉajn horojn en tiu ĉi ĉambro; ĉu ne, Vilfrido?

(Luyken 原作 *Mirinda Amo* p. 39)

難かしいものに頭をひねくるより、こうゆう易しい文を澤山讀んで Esp. に慣れた方が得だ。所々出て来る會話等に必要な語句に sublinii しておく事。Ŝidlovskaja の譯書である *Princo Serebrjani* (A. Tolstoj 原作)、*Sonĝo*

de Makaro (Korolenko 原作)、*Kapitanfilino* (Puŝkin 原作)も „坦々たる大路を行くが如き“ 名文である。

(C) すうっさしている代りに單調な Kabe に比べて Grabowski の文は天馬空を行くの概がある。その表現のにぎやかさ、彼の用いた nova vorto が殆んど全部 oficialiĝi したのを見てもいかに彼が genio であるかがわかる。彼の譯書: *Sinjoro Tadeo* (Mickiewicz 原作)、*Halka* (Wolski 原作)等。

(D) 今賣り出しの originala poeto, Baghy には目新しい詩的な表現が多い。

Rufus ne povis aŭdi liajn vortojn, ĉar la tondra respondo de la popolo superbruis ĉion. (*Unu el la kvar*)

詩集 *Preter la Vivo*, 小説集 *Dancu Mario-netoj*, *Viktimo* 等がある。

(E) Realismo sola estas malnobla. Idealismo sola estas malpraktika. Idealismo estas la vivmotivo kaj la kaŭzo de sindono, sed realismo devas esti la metodo. Unu devas ordoni, la alia devas plenumi. Idealo nin inspiru, realigo nin okupu. (*Esperanto* Jul.-Aŭg. 1922)

時々文法を無視したり變な言葉を使つたりはするが、彼 Privat は流石に „Esp. は vivanta lingvo de vivanta popolo だ“ と叫ぶだけあつて、彼の文たるや實に生氣發洩たるものがある。U. E. A. の機關雜誌 *Esperanto* 毎號の卷頭を飾る彼の論文は Esp. 文體發達史上重要な位置を占めるであらう。我々は Grabowski, Kabe 等の klasikaĵoj と共に現代の雜誌 (*Esperanto*, *Heroldo de Esp.*, *Sennaciulo* 等)も研究せれば時代におくれる。

(F) 始めは何か適當な教科書一冊を選んで精讀した方がよいが、一通り解つたら種々 metodo の違つた初等教科書を漁るゝ知識が確實になる。Marlborough's *Esp. Self-Taught*, p. 83 に

Mi vidis, ke ŝi ploras = I saw (that) she was crying.

Mi sciis, ke li venos = I knew that he would come.

Mi sciis, ke li jam alvenis = I knew (that) he had already arrived.

所謂 konkordo de tempoj とゆうやつ、英語の本だからこんな事が出ている。日本人でも英語を知つてゐるから却つて間違い易い例である。

(G) 最後に Aymonier, Grosjean-Maupin 共著の *Cours méthodique d' Esperanto, version* を紹介しておこう。これは Zamenhof 其他

の著作から抜書した *esprimaro* を文法的に分類したもの、表題がフランス語のため手をひつこめる人が多いが内容は殆んど全部 Esp.

閑 人 閑 語

(1)

岡 本 好 次

エスペラントも既に四十年の生命をもつ今日その包含する数千の語彙も既に数十年の歲月を経て来た譯で時の流れと共に随分變化したのもあり今日全くその影を没したのもあれば大いに發展しつつあるものもある。忙中閑を偷んで氣のむくまゝに一々の單語を手あたり次第にさりあげてその故事來歴を見てみよう。併し何分淺學の上に材料貧弱の爲隨分まちがった推論に陥入るかも知れません。此の點同志諸賢の御寛恕と御示教をまつ次第です。

I. HARARO

我エスペラントの Fundamento の一として未來永劫に亘り全く變更を許されない *Universala Vortaro* 中の各國語譯はかなりの誤譯を含んでゐる事は何人も認める所である。その誤譯を訂正する意味で *Akademio* から “*Korekto de la Eraraj Tradukoj en Universala Vortaro*” が發表されたのである。(英佛獨露波の五箇國語夫々別冊になつてゐる。) *Akademio* は之によつて各國の辭書編纂者の注意を喚起したのである。併し U. V. その者は全然不可侵のもの故依然として舊態の儘で出版されてゐる。それ故私は U. V. を辭書代りに使用するのを餘り獎勵すべきでないといふ意見をもつてゐます。例へば *mendi* (註文する) の譯語をみるに

mend' | *mander, commettre* (佛) | *commit* (英) となつてゐる。これではどうしても「註文する」意味にされない。G. Maupin によれば *mendi* の佛譯は *faire la commande de, commander* (*komerca*), *Millidge* の英譯は *to order, give an order or commission for (goods)* となつてゐる。これでなくては「註文する」と云ふ意味にならない。こんなのをあげれば限りがない。併し前述の如く U. V. は絶對不可侵である、それで最近 *Akademio* で U. V. の譯語を是正して *Oficiala Klasika Libro de Esp.* を出した。尤も此本には U. V. 以外の *oficialaj vortoj* も全部挿入されてゐるが in-

ternacie kompreneblaj radikoj に譯語のついてゐないのは遺憾である。併しこれでも可成氣をきかせた注意書が所々に入つてゐるのでよい。例へば *neŭtr'* は *gramatiko* 及 *hemio* の時つかひ *neŭtral'* は *politiko* 上に使ふ事が明示されてゐるが如きそれである。尙この O. K. L. は今後も誤譯その他を認めたらドシドシ改正されてゆく時代に適應したものになつてゆくにちがひない。私は本書を心ある同志の座右に御すゝめしたい。

本論をよそに大分脇道へそれたが、この *Universala Vortaro* 中の語でその譯語が誤譯でなくしかも今日その譯語の意味に全然使はれてゐない語は私の知る限りにおいて *har'ar'o* なる語唯一つかと思ふ。即ち *Universala Vortaro* の *har'o* の項の次に *har'ar'* | *perruque* | *periwig* | *Perücke* | *parikb* | *peruka* となつてゐて即ち *hararo* は明かに鬘(マ)と云ふ事になつてゐる。しかも今日我々はこれを鬘の意味には全然使つてゐない。今日は鬘を云ひ表はすに *peruko* (U. V. の *Unua Aldono* として *oficialigi* された語) と云ふ語を用ひてゐる。そして *har'ar'o* は頭髮その他一群の毛髮の集團をさして云ふ事につかはれてゐる。(因みに *haro* は一本の毛髮をさす。) それで上述の *Korekto de la Eraraj Tradukoj* en U. V. の *franca* 及 *germana partoj* (*pola* 及 *rusa* にはなし *angla* は手許になく不明) には *harar'* の譯語を誤譯として

har'ar' | *chevelure* (佛) | *Behaarung* (獨) となつてゐる。*Wüster* もその *Enciklopedia Vortaro* で *hararo* を *peruko* の意味につかふのはよくないとしてゐる。Z 博士は之をどう使つたか調べてゐないので判らないが1888年に出した *Dua Libro* の *Ekzercaro* の中には *hararo* を *peruko* の意味に使つてゐると思はれる様な次の様な用例がある。

La hararo defalis de lia kapo, kaj mi vidis grandan senharajon, kiun li pro malvera honto ĉiam tiel zorge kaŝis. 外に *hararo* の Z 博士の用例御氣づきの方はお示し下さい。

はないか。是に反して、假令、萬億の金を所有してゐても更に多くな奪はうとのみ企てゐる人こそ、實に賢しい人といふべきではないか、と。而して、此考が現代に於て猶更、眞實だといふ事は、天下の富豪が決して幸福でない生きた事實を、近頃新聞紙が報道したことに依つて裏書きされたやうにも思はれるのである。

eco al aliaj portas? Kontraŭe, se li volas rabi plue, kvankam li posedas jam bilionon da mono, tiu efektive devas esti nomata malriĉulo. Kaj ke tiu ĉi penso estas ankoraŭ pli vera nuntempe, estas certigite per gazeto kiu lastatempe raportis pri vivanta fakto ke riĉuloj estas tute ne feliĉaj.

質 疑 應 答

★ イソップ物語 第一課 La Azeno kaj la Akrido はキリギリスとなつてゐますが、そうすると lokusto と同意義の様ですが Butler の First Step in Esperanto に Lokusto = grasshopper; akrido = locust となつてゐます。akrido はバツタ (akrida) の類でキリギリス (locusta) ではない様な氣が致します。(長野縣中村氏)

◇ [答] 實は Rhodes の英エス及び Fulcher and Long の英エス辭典で Grasshopper を引いて akrido を用ひたものであります。何分動物學者でないので何れがよいか迷ひます。専門の方の御教示を願ひたいと思ひます。なほ参考のために上記字典の譯と齋藤英和(熟語本位)、井上英和の譯をそへます:

Cricket=Grilo (Rhodes); grilo (Fulcher);

コホロギ(齋藤); コホロギ 科の蟲, キリギリス(井上)

Grasshopper=akrido (Rh.); akrido (Ful.);

イナゴ(齋); コホロギ(井)

Grig=Rhodes, Fulcher 共に此の語なし;

コホロギ(齋); コホロギ, バツタ(井)

locust=akrido (Rh.); akrido (Ful.);

イナゴ, バツタ(齋); キアシバツタ(井)

英語では何れも oroptero の種で大きな奴が grasshopper, 小さな奴が locust と云ふらしく思はれます。なほ Boirac の Plena, Vortaro, Kabe の Vortaro, Verax の Enciklopedio Vortaro, Millidge のエス英, Bennemann のエス獨を見ますと

Akrido=insekto (locusta, acridum), sauterelle, criguet (Boirac); insekto, detruanta grenojn (Pachytylus migratorius, Acridae) (Kabe); Criquet, g. de insektoj oropteraĵ (Verax); locust (acrida) (Millidge); Heuschrecke (Bennemann)

Grilo=insekto oroptera (gryllus), grillon (Boirac); insekto el la familio de la rek-

toflugiloj, vivanta en fendoj kaj poroj, faranta bruon per la frotado de la flugiloj (Gryllus) (Kabe); Grillon (Verax); Cricket, grig (locusta) (Millidge); (Grassgrille, Heimchen (Benn.))

Lokusto=speco de oropteroj, saltakrido (locusta), sauterelle (Boirac); Kabe には此の語なし; sauterelle (locusta), g. de oropteroj saltuloj (Verax); Grasshopper (locusta) (Millidge); Grashüpfer, Heuschrecke (Benn)

Grilo はコホロギ, Boirac 及び Verax に従へば akrido はイナゴ, lokusto はバツタの様にも思はれます。キリギリスは或は kampa grilo と云ふのが一番温當かとも思ひますが、専門家の御意見を伺ひたいと思ひます。

★「エス初等講座」12頁には根尾 finaĵo とあり、「エス捷徑」の12頁には語尾が finiĝo とありますが何れを用ひても可なりや。(千葉縣大塚氏)

◇ [答] 何れでも差支へありません。くわしく云へば gramatika finiĝo ですが、文法の話をしてゐるのですから gramatika は省いてもよいわけです。Zamenhof の Plena Gramatiko (文法十六條) には finiĝo が用ひてあります。

★「初等講座」29頁文法(1)の(b)中2及び2の文中にある en なる語は誤りかと思はれますが如何でせうか。(同氏)

◇ [答] 間違ではありません。

{ plej diligenta el ĉiuj 皆の内では(内から撰れば)……

{ plej diligenta en la klaso 級中で

同様に Fuji estas la plej alta monto en Japanujo. 日本國中では。

el は多くのものの中で(中からより出せば)、en はある場所の範圍の中では。

En la Muzeo

【博物館で】

de Seisensui Ogiwara

tradukis Macue Sasaki.

博物館で、私は太古の頃の貨幣である美しい貝殻を見た。原始人が此貝殻を以て、物を買つたり賣つたりする子供のやうな、眞面目な取引を想像して見るさ、微笑せられる。其貨幣は、太古の人の心持では、恐らくは、自分に物を與へてくれた人に對する美しい感謝の表識であつたので、決して彼等が欲望の對象ではなかつたのであらう（その貝殻は濱邊へでも行けば大なる勞をせずして得られさうなものである）。左様に、その昔は美しい表識であつた貨幣といふものが、現代では往々罪惡の根原のやうに考へられてゐるのは不思議ではないか。原始時代には買手が賣手に對して「ありがとう」と云つたであらうに、現代では買手が賣手から「ありがとう」といふ言葉を強要してゐるのはおかしいではないか。

旅で、私は茶店に腰をおろした。私は渴ききつてゐたので、老婆が持つて來た土瓶を幾度もかへさした。茶代として僅かの金を置いた時、私はこんな事を思つた。——此金は此場合に、物に對する代償としての意味ではなく、感謝の表識として用ひられるのだ（それは一定額を要求されるものではなくて、こちらの志だけが表はれるのだ）、而して、之が本當の金錢の使ひ方ではないのか、さ。

金錢が奪略の象徴となる時、それは汚ないものとなる。然し、其の同じ金錢が感謝の表識となる時、それは美しいものだ。原始人の用ひた貝殻のやうに美しいものだ。勿論、現代の私達が、かうした原始的な心持ばかりで生きて行く事は出来ない。それは私も知つてゐる。然し、現代に於ても、金錢といふものが感謝の表識であるといふ性質を失つてゐないものとしたならば——次の事が考へられる——他に對して感謝し得る心を、多く持つてゐる人こそ、眞に富んでゐる人といふべきで

En la muzeo, mi vidis belan konkon, kiu estis mono en primitiva tempo. Mi ne povas ne rideti kiam mi imagas infanan kaj seriozan negocon, kiun primitivaj homoj faris, aĉetante kaj vendante per tiaj konkoj. Mono, por la primitivaj homoj, eble estis simbolo de pura dankemeco al donanto, kaj neniam objekto de ilia dezirego (ŝajnas ke tia konko estis akirebla ĉe marbordo sen multe da laboro). Do, ĉu ne estas mirinde ke la mono kiu estis bela simbolo en malnova tempo, estas nun ofte rigardata kiel la radiko de krimo? Estas supozeble ke en la primitiva tempo, aĉetanto dankis vendanton, sed nuntempe aĉetanto devige postulas la vorton "dankon" de vendanto. Ĉu ne estas strange?

Mi iam vojaĝante, ripozis ĉe tebudo. Mi estis tiel soifa, ke mi multe da fojoj malplenigis la kruĉon alportitan de maljunulino. Kiam mi lasis malmultan monon, mi pensis jene: tiu ĉi mono, en tiu ĉi okazo, ne signifas kompencon por aĵo, sed estas uzata kiel simbolo de dankemeco (tiaokaze difinita sumo ne estas postulita, sed oni pagas nur laŭvole), kaj ĉu tio ĉi ne estas vera maniero uzi monon?

Kiam mono fariĝas simbolo de rabado, ĝi fariĝas malpura. Sed kiam ĝi estas simbolo de dankemeco, ĝi estas bela, tiel bela kiel konko uzita de primitivaj homoj. Kompreneble ni modernuloj ne ĉiam povas vivadi kun tia primitiva ideo. Tion mi ja scias. Sed, eĉ nuntempe, se mono ne estus perdinta econ de dankesprimado, mi pensas ke li devas esti nomata vera riĉulo, kiu multe da dankem-

BORDO DE FIŜVENDEJOJ

芥川龍之助作『魚河岸』

El la verkoj de Akutagaŭa-Rjunosuke.

Tradukita de Keikiti Kawada.

Unu vesperon en la printempo lastjara, kiam la vento estis ankoraŭ malvarma kaj la luno brilis serene, ĉirkaŭ la 9-a horo Jasukiĉi promenis kun siaj tri amikoj sur la strato de la fiŝvendoplaco. La tri amikoj estis Rosai, poeto, Fuĉu, pentristo, kaj Ĵotan, lakajpentristo, kiuj estis jam fame konataj en siaj profesioj, malgraŭ ili laboris sub la pseŭdonimoj.

Precipe Rosai, la plej aĝa el ili, jam de longe havis sian famon kiel unu haikupoeto¹⁾ kun nova tendenco.

Ili ĉiuj estis drinkintaj. Sed ĉar Fuĉu kaj Jasukiĉi ne tiel ŝatas drinkadon kaj Ĵotan estis bonkonata drinkegulo, tial ili tri aspektis nedrinkintaj. Nur Rosai faradis iom ŝanceliĝantajn paŝojn.

Ili piediris sur la strato plenigita de fiŝodora aero en lunlumo en la direkton al Nihonbaŝi, Rosai marŝis meze de nia rondeto. Rosai estas ĝis-osta Jedokko.²⁾

Lia praavo estis intima amiko de Ŝokusanĵin, Bunĉo kaj aliaj. Lian domon ĉiu konis en tiu ĉi kvartalo sub la nomo „Marusei de la bordo.“ Tamen, Rosai, lasante sian prapatran komercon tute al siaj komizoj, mem loĝas en malgranda strateto en San-ja kaj ĝuis haiku-versadon, skribarton kaj skulptadon.

Tial oni trovas en Rosai ian viglanimecon, kiu mankas en la aliaj.

Tio estis io,—iom pli spitema ol ĉe ordinaraĵoj³⁾ Sitamaĉi-anoj, kompreneble tute diferenca de tio ĉe Jamanote-anoj⁴⁾ —havanta ion, tiel diri, komunan kun Magurozuŝi⁵⁾ de la bordo. Rosai paroladis gaje kun ni, de tempo al tempo forŝovante sian mantelon, kvazaŭ ĝenaĵon. Ĵotan ĉiam kun rideto kvieta konsentadis al li dum lia parolado. Tiele marŝante ili sin ektrovis ĉe la fino de la fiŝvendista bordo. Ili iel ne volis tuj forlasi la bordon. Ili vidis unu restoracion. La luno ĵetis lumon sur ĝian blankan kurtenon pendigitan ĉe la enirejo. Pri tiu restoracio aŭdis eĉ Jasukiĉi jam kelkajn fojojn.

1. Haiku aŭ Hokku=deksep-silaba odo. 2. Jedo, antikva nomo de Tokio. Jedokko=Jedo-ano, signifas viglaniman homon. 3. Sitamaĉi=komercaj kvartaloj. 4. Jamanote=logkvartaloj. 5. Magurozuŝi=vinagrita rizpudingeto kun tranĉo nekuirita fiŝo, karakteriza manĝaĵo ŝatata de Jedokko.

【註】 la luno … serene 月が冴えてゐた。 lak'aj'pentristo 蒔繪師。 jam fam'e'kon'ataj en siaj profesioj (又は metioj) その道では知られた腕つ抜き。 malgraŭ ili laboris sub la pseŭdonimoj (=pseŭdonime) 本名は明かさないが。 precipe 中でもわきて、殊に。 類語：(ĝenerale 一般的に對して) 格別に、特別に。 de longe 夙に。 nova tendenco 新傾向。 ne ŝatis drinkadon=estis nedrinkemaj 下戸であつた。 bon'kon'ata drink'eg'ulo 名代の酒豪。 aspektis

nedrinkintaj (=sobraj) ふだんさ變らない、しらふの様。 far'adis ŝancel'ig'antajn paŝojn 足もさがあふなかつた。 en la direkton al… …の方へ(向つて)。 ĝis'osta Jedokko 生つ粋の江戸ツ子。 estis intima amiko de… …と交遊が厚かつた。 las'ante sian pra'patran … komizoj 家業は人(手代)まかせにして。 ĝuis 楽しんでゐた。 oni trovis en Rosai … la aliaj. 露柴には吾々にない何處かいなせな風格があつた。 iom pli spit'ema … 下町氣質よりは傳法な。

„Ni eniru?“ — „Mi ne rifuzas“....Antaŭ ol ili finis, ili, Fuĉu la unua, kaj la aliaj, jam sin trovis interne de la malvasta restoracio. Sidis du gastoj ĉe longa kaj malvasta tablo. Unu el ili estis ŝajne junulo de la fiŝvendista bordo kaj la alia metiisto de ia fabriko. Ili petis ilian konsenton aliĝi al la sama tablo kaj sidiĝis unu kontraŭ alia. Ili komencis trinketi rizbrandon Masamune kun fritajo de Tairagai-konkajo.

Nature Fuĉu kaj Jasukiĉi, maldrinkemuloj, ne trinkis pli ol du tasetojn,⁶⁾ sed en atakado de manĝaĵoj ili ambaŭ estis tre fortaj.

La tabloj kaj seĝoj en tiu ĉi restoracio ne estis lakitaj. Krom tio la ĉambro estas ĉirkaŭita de kanoplektaĵoj laŭ la maniero de la antikva Jedo-tempo. Tial oni ne sentas sin sidanta en eŭropmaniera restoracio, se oni manĝas tie ĉi eŭropajn kuirajojn. Ekzemple kiam oni alportis bifestekon ordonitan Fuĉu nomis ĝin „kirimi“ laŭ japana propra kuirajo.

Al Ĵotan estis miro, ke la tranĉilo tranĉis tre bone. Al Jasukiĉi estis plezure, ke la elektra lampo brilis tre hele, konvene por tia loko. Al Rosai ŝajnis esti nenio interesanta, ĉar li estis naskita en la loko. Kun sia ĉapo ŝovita malantaŭen, li tamen paroladis ĉiam ankoraŭ gaje, proponante reciproke sake-taseton kun Ĵotan.

Ĝuste tiam eniris tra la kurteno ĉe la sojlo unu gasto kun ĉapelo sur la kapo kaj kun grasaj vangoj duone en pelta kolumo de lia palto.

Li ĉirkaŭpromenigis siajn okulojn tra la malvasta ĉambro, kvazaŭ akre rigardi.

Sen unu vorteto de saluto, li enŝovis sian grandan korpon por sidiĝi inter Ĵotan kaj la junulo. Jasukiĉi, kiu estis manĝanta rizon kun piksaŭco, eksentis malŝaton al la malagrabla gasto kaj pensis ke li estas homo ĝuste de tia tipo, kiu estus senkompate atakota de iu „kavalirema“ gejšo⁷⁾, kiel oni ofte trovas en la novelo de Izumi-Kjōka.

Sed li ankaŭ opiniis, ke la afero ne tiel iros en moderna Nihonbaŝi⁸⁾ kiel en la novelo de Izumi-Kjōka.

6. Oni trinkas rizbrandon („sake“) en taseto. 7. Gejšo = Japana kantistino.

8. Kvartalo, en kiu sin trovas la bordo de fiŝvendista placo.

kompren'eble tute... 山の手には勿論縁の遠い (何物かがあつた)。hav'anta ion, tiel diri, komunan ... 云はば河岸の鮎の鰭と一味相通する何物かがあつた。de tempo al tempo 時々。for'ŝov'ante sian mantelon kvazaŭ ĝenajon. 邪魔そうに外套の袖をはねながら。Ili vidis unu restoracion. La luno -- pend'ig'itan ĉe la en'ir'ejo 其處に洋食屋が一軒片側を照らした月明りに白い暖簾を垂らしてゐた。Antaŭ ol ili finis. そんな事を云ひ云ふ内にもう。ĉirkaŭ'ita de

kan'o'plekt'ajoj ... Jedo-tempo 店を圍ふ物は江戸傳來の蓆簀だつた。se(=eĉ se)oni manĝas ... 洋食は食つてゐても。Kun sia ĉapo ŝov'ita mal'antaŭ'e'n 烏打帽を阿彌陀にした儘。ĉiam ankoraŭ 不相變。propon'ante reciproke sake-tas'eton 献酬を重ねては。kun grasaj vangoj ... palto 外套の毛皮の襟に肥つた頬を埋めながら。ĉirkaŭ'promen'igis siajn okulojn ... ĉambro 狭い店の中へ眼をやつた。rizon kun pik'saŭco ライスカレーを。homo ĝuste de tia

La gasto ekfumis kun aroganta maniero post kiam li ordonis mangâjojn. Oni povis des pli preni lin por aktoro ĝuste taŭga al malamato en dramo, ju pli bone oni observas lin. Superkimono el Oŝima, fingroringo kun sigelilo, ne parolante jam pri lia grasega kuprokolora vizaĝo—ĉiuj ĉi tiuj estis de la tipo.

Jasukiĉi parolis al Rosai, sidanta najbare por forgesi pri la gasto, ĉar li sentis sin pli kaj pli forte ĝenata. Rosai tamen redonis nur tre apatiajn respondojn per interjekcioj „un“ aŭ „ee.“ Li pli malsupren tiris sian ĉapon, kvankam li sidis kun la dorso kontraŭ la lampo. Versajne li estis ankaŭ venenata de la gasto.

Jasukiĉi paroladis al Jotan kaj Fuĉu pri mangâjoj, ĉar li ne povis fari alie, sed la parolado ne iris gaje.

Estis videbla fakto, ke en ilia koro ekaperis iaj malordoj pro la apero de tiu grasulo. Kiam la ordonita fritajo venis la gasto ekprenis la botelon de Masamuneo⁹⁾ kaj volis verŝi la sake'on en sake-taseton. Ĝuste tiumomente iu vokis klarvoĉe „Kô-san.“ La gasto estis tre surprizita kaj la surprizo ŝanĝiĝis subite en konfuzon, kiam li eksciis, de kiu venis la voĉo. „Ha, sinjoro,“ demetante sian ĉapelon, multfoje salutadis la gasto al la alparolinto. Tio estis Rosai, poeto—la mastro de „Marusei de la bordo.“

„Longan tempon ni ne vidis nin, ĉu ne?“ kaj Rosai metis sake-taseton al sia buŝo kun indiferenta mieno. Kiam la taseto estis malplenigita, la gasto enverŝis sake'on el sia propra botelo en la taseton de Rosai. Post tio li komencis flati Rosai per vere ridinda maniero.

La novelo de Kĵoka ankoraŭ ne mortis. Simila afero, kiel skribita en lia novelo, povas okazi ankoraŭ en la nuna Tokio, almenaŭ en la kvartalo de fisvendoplaco.

Sed Jasukiĉi estis melankolia, kiam ili estis ekster la restoracio. Jasukiĉi havis nature nenian simpatian al „Kô-san.“ Plue laŭ la parolo de Rosai oni povis supozi, ke la gasto estas ne de bona karaktero.

Spite de tio li ne povis fariĝi gaja.

Sur la tablo en la studĉambro de Jasukiĉi kuŝas la „Vortoj de Rochefukau,“ kiujn li ankoraŭ ne finlegis,—Jasukiĉi ial ekmemoris ĝin, marŝante en la lunlumo. (*Fino*)

9. Nomo de sake.

tipo, ke gejšo 任俠喜ぶべき藝者か何かに退治される奴。kiel oni ofte Kĵoka これが泉鏡花の小説だ。kun aroganta maniero=kun malŝatemo 横柄に。Oni povis des pli preni... observas lin. その姿は見れば見る程敵役の寸法に嵌つてゐた。ĉiuj ĉi tiuj tipo 悉く型を出でなかつた。sentis sin ĝen'ata 愈々中てられた。redonis tre apatiajn....“un” aŭ “ee”. うんさかえさか好い加減の返事しかしてくれなかつた。pli mal'supre'n tiris sian ĉapelon 烏打を目深にしてゐた。li sidis kun la dorso kontraŭ la lampo 電燈の光に背き乍ら。ĉar li

ne povis fari alie 止むを得ず。sed la parolado ne iris gaje 話ははずまなかつた。la surprizo ŝanĝiĝis subite en konfuzon その驚いた顔は忽ち當惑の色に變つた。kiam li eksciis, ... voĉo 聲の主を見たとき。de'met'ante sian ĉapelon 帽をぬぎながら。al'parol'into 聲の主(話しかけた人)。kun indiferenta mieno 涼しい顔をしながら。Kiam la tas'eto estis mal'plen'ig'ita 猪口が空になるさ。melankolia 心が沈んでゐた。stud'ĉambro 書齋。kiujn li ... fin'legis 読みかけた(ロシフコの語録)。marŝante en la lun'lumo 月明りを履み乍ら。

FATALISTO

—[8]—

〔國木田獨步原作『運命論者』連譯小説第八回〕

[Laŭ la peto de l' redaktoro tiun ĉi noveleto tradukas dekelkaj eminentaj sinjoroj laŭvice.]

tradukita de D-ro Joŝihiko Sumi, lektoro de Keiō Universitato.

“Mi volus iom demandi...” Apenaŭ la vortoj elpuŝiĝis el mia buŝo, la patro ŝajnis jam ĉion kompreninta.

“Kion?” dignoplena li sin antaŭen ŝovis.

“Patro, ĉu mi efektive estas via propra filo?” mi rekte demandis lin, kiel mi jam antaŭe decidis.

“Kio?” Akresona voĉo de l' patro, lia pikanta rigardo! Sed al li tuj revenis milda mieno kaj li demandis. “Pro kio vi demandas min pri tia afero? Ĉu ni faris ion nedecan kiel viaj gepatroj?”

“Ne pro tio mi diras, sed jam de longe en mi restas ĉi tiu dubo, kiu ĉiam min afliktis, pro kio mi mem ne scias. Kredeble vi silentas pri la afero kaŭze de tio, ke la malkovro de l' sekreto al mi alportos nenion utilan; tamen mi nepre volas tion ekscii.” Mi eldiris ĉion ĉi tion trankvile kaj decide.

Interplektante la brakojn, la patro meditis en la daŭro de kelka tempo, li levis la kapon malrapide.

“Mi sciis, ke vi dubas pri la afero, kaj tial mi foje ekpensis esti pli bone, ke mi mem eldiru la unua. Mi nun ekdiros, des pli bone, ke vi min demandis.”

La patro rakontis al mi la longan historion. Tamen ĉio, kion mi eksciis estis nenio alia ol la jena:

Kiam mia patro servadis ĉe la loka juĝejo en urbo Jamaguĉi, li konatiĝis kun iu Go-amanto nomata Kinnosuke Baba, kiu fariĝis lia intima amiko kaj intervizitadis kiel fratoj. Tiu persono posedis ion genian, je kio li respektis lian personecon. Mi ja estas *lia* propra filo.

La patro tiam estante tridekok-jara, kaj la patrino tridekkvar-jara, jam ne havis plu esperon naski infanon, kiam Baba mortis pro malsano kaj lia edzino ankaŭ lin postsekvis baldaŭ, postlasante du-jaran knabeton. La patro adoptis la infanon por savi la orfon.

【註】 el'puŝiĝi 押し出される様に出て来る。digno'plena 威厳に充ちた。rekte 單刀直入に。akre'sona 鋭く響く。pikanta 刺す様な。milda 柔和な。aflikti 悩ます。malkovro さらけ出すこと。ĉion ĉi tion 一部始終を。decide 決然と。inter'plekti 組み合わせる。en la daŭro

de kelka tempo 暫時。des pli bone, ke vi min demandis. お前の方から尋ねて呉れたのだから尚更よい。Go-amanto 碁客。posedis ion genian どこか知れ天才的な所があつた。post'sekvi 後を追ふ。post'lasi 後に遺す。adopti 養子にする。esti registrita 登録される。

Laŭ la rakonto de l' adoptinto, miaj veraj gepatroj estis ankoraŭ junaj: la patro tridekdu-jara, la patrino dudekkvin-jara. Antaŭ ol la patrino estis registrita kiel la edzino de Baba, mi naskiĝis kaj eble pro tio, mia naskiĝo ankoraŭ ne estis publike informita, kaj tial la adoptinto Oocuka tuj min prezentis kiel sian propran filon.

Tiel parolinte la adoptpatro daŭrigis: "Tial ke mi baldaŭ poste forlasis la urbon Jamaguĉi, nur malmultaj scias la fakton, ke vi ne estas mia propra filo. Mi kaj mia edzino edukis vin tute kiel mian propran filon. Ĉar nia sintenado restos ĉiam sama kiel antaŭe, vi ankaŭ sen antaŭjuĝo estu apogilo de nia maljuneco. Hidesuke estas mia propra filo, sed ĉar mi neniam sciigos al li pri la sekreto, helpu lin dum la tuta vivo kiel vian veran fraton."

Kiam li finis la parolon, mi ekvidis larmojn en liaj maljunulaj okuloj, tamen mi mem jam estis ploranta antaŭ ol li.

Tiam, mi promesis kun la adoptpatro, ke ni estos singarda kun la sekreto kaj mi nur private vizitos la tombojn de l' gepatroj, eĉ se mi havus okazon veturi al Jamaguĉi.

De tiam, la tagoj forpasis al ni pli facile. La adoptpatro ŝajnis esti pli trankvila pro la elŝarĝigo de sia interna ĉagreno; mi estimis lin elkore kaj studis pli diligente, pensante kiom mi ŝuldas al li, kaj mi firme decidis al mi, ke mi eniru en la memstaran vivon kiel eble plej baldaŭ, kaj apartiĝinte de l' familio de Oocuka, mi lasu al Hidesuke heredi la familian estrecon.

Tri jaroj rapide foriris. Mi estis gradigita de la lernejo, sed laŭ la konsilo de l' adoptpatro, mi daŭrigis studadon ankoraŭ unu jaron, kaj mi neatendinte sukcesis al la ekzameno por advokatoj. Tio kaŭzis grandan ĝojon al la adoptpatro kaj li senprokraste prezentis min al la jura oficejo de sia amiko D-ro Inoue.

Iel mi povis vizitadi la oficejon en Kjobaŝi-kvartalo kiel kapabla advokato. Se ĉio estus tiele pasinta ĝis ĉi tiu tago, la adoptpatro aranĝus por mi laŭ sia espero kaj mi ankaŭ pasigus kvietajn tagojn, ĝuante mian estontan feliĉon.

Tamen, malgraŭ ĉio, mi ja estis filo de l' kruela sorto. Atendis min faŭko de trompkavo, en kiun enpuŝegis min demono de l' kruela sorto.

tial ke ... であるから。tute kiel ... さ全く同様に。sin'ten'ado 態度。antaŭ'juĝo 偏見。apog'ilo 寄る邊。nask'ita frato 眞實の兄。esti sin'garda kun ... に留意する, 注意する。el-ŝarĝ'igo 重荷を下してしまつた事。mem'stara vivo 獨立の生活。familia estr'eco 家督。esti

grad'ig'ita 卒業する。advokato 辯護士。sen'prokraste 早速, 猶豫なく。jura ofic'ejo 法律事務所。malgraŭ ĉio どうしても, ごきごきまでも。kruela sorto 惡運。faŭko de tromp'kavo 陷阱の頸。en'puŝ'egi ひごく突き下す。adopt'patro = adopt'inta patro 養父。

會員の聲

新設された此の欄は、なるべく議論めきで interesa な事件の報告等や Revuo 誌への希望等をのせたいと存じます。

★學會編輯委員諸先生の御努力を感謝致します。殊に今度「會員の聲」欄設置を祝します。滿天下の會員諸兄弟大いに本欄を活用しようではありませんか。小生の最も希望する點は本欄をして飽迄も和氣横溢興味津々たるものにしたいと思ふのであります。餘り下品に亘つたり、餘り議論めいた事はめきにして大いに投書しようではありませんか。小生は此の最初の投書に際し preseraro に関して二三の興味深い失敗談を御話し申す。

1) 某氏より聞いた話ですがある esperantisto が D-ro Zamenhof をその家に訪れた所 sinjorino もでられて大いに御馳走になつたんだそうです。それでその同志は早速その旅行談及 Z 博士訪問記を某エス雑誌へ寄稿した所がエス運動の初期の時の事故御多分に洩れず中々 preseraro が多く殊に同氏が Z 博士に感謝の意味で Z 博士邸で大いに御馳走になつたのでそれは自分にまつて granda festo (大祝) だつたと書いたのに、雑誌の方には granda fasto (大斷食、大精進) となつて大いに恐縮した所その後 Z 博士夫人とある會であつた時夫人は同氏に「先達は御馳走ができなかつて失禮しました今度はウンと御馳走します」と云はれて穴があれば入りたい氣持だつたと述懐された。

2) l ă r の誤植は日本では時々おこる問題だが、最近でくわした面白い例をあげる。これは實は印刷でなく skriberaro である。ある戯曲の最後に Ibsen の “Reaperintoj” の最後が la sunon! la sunon! といふ語をもつて終つてゐる様に

Donu al mi lumon! lumon! (光を!) で終つてゐるのを誤植して

Donu al mi rumon! rumon! (ラム酒を) となつて dramo の最後の力點が臺なしになつた。(Verda Rivero 生)

★Estimataj Fraŭlinoj-esperantistinoj!

Nun ni havas la honoron nin turni al vi, estimataj fraŭlinoj, per tiu ĉi rubriko kun jenaj vortoj. Ni deziregas ke vi ĉiuj nepre devas edziniĝi kun sinjoroj-esperantistoj, por ke vi ĉiuj povu fondi veran esperantistan

familion. Precipe en Japanujo la sinjoro-edzo havas grandan potencon, aŭ pliĝuste li estas iom despotema, kaj tial se la edzo ne estas esperantisto, la edzino, kiu estas eĉ fervorega esperantistino, ne povas bone daŭrigi la studadon de Esp. kaj ankaŭ ĉeesti ĉe esperantistaj kunsidoj. Kompreneble la edzo ne tiel despote malpermesus daŭrigi la studadon de Esp., sed tion vidante li ne ĝojus kaj tial la edzino vole-nevole devas ĉesigi la studon.

Jes, troviĝas multe da tiaj sinjorinoj-edzinoj, kiuj estis tre fervoraj por Esp. en sia fraŭlineco, ankaŭ fariĝas malfervoraj post la naskiĝo de sia unua infano.

Sed eĉ se en tia okazo, la edzino povas havi ankoraŭ multe da fervoreco kaj espero al nia kara lingvo, se ŝia edzo estas fervora esperantisto.

Kaj tial mi tutkore rekomendas ke vi, fraŭlinoj-esperantistinoj, devas nepre edziniĝi kun sinjoroj-esperantistoj, por ke vi povu senzorge daŭrigi vian esperantistan vivon por eterne.

Kaj ni esperas ke vi ĉiuj serĉu vian plibonan duonon de via estonta edzineca vivo inter sinjoroj-esperantistoj.

Per tiu ĉi diro ni tute ne esperas ke vi fariĝu koketulinaj, sed ni esperas ke vi serioze pripensu pri via situacio, pri viaj cirkonstancoj kaj prudente konduku laŭ via bontrovo.

Se vi bezonas rian helpon, ni ĉiam estas pretaj esti peranto(aŭ svatanto) inter amantaj gesamideanoj.

(G. Micuîşi kaj J. Okamoto en J. E. I.)

★昨夏有爲の材をいだいて長逝された我が熱心な同志東宮豊達君の遺兒教育會が生れ一口二圓以上の寄附金をあつめ生前同君と知り合であつた方々の御援助御支持をお願いしましたが其後今日に到る迄この企に御賛同下さつて御應募下さつた方々の人数は我々發起人の豫定人数の半分に満たない程で大變残念に存じます。未だ今日迄御申込ない方々は來3月末日が締切ですから早速御申込下さい。今度は皆様の御送金の便宜を計り日本エス學會(振替口座東京11325番へ御拂込の事)でも取扱ひます。但しその旨御明記の事。猶同氏の遺稿「惜みなく愛は奪ふ」は目下小坂狷二氏御校閲中で遠からず印刷になる事と存じます。

東宮豊達君遺兒教育後援會

(委しくは本誌廣告第4頁を御覽下さい)

Aliĝilo

por

La XVI-a Japana Kongreso de Esp.

Dato: _____

Nomo de Familio: _____

Nomo persona: _____

Profesio: _____

Strato kaj N-ro: _____

Urbo aŭ Vilaĝo: _____

Gubernio: _____

Mi apartenas al la (Loka) Grupo: _____

Mi estas izola en la Regiono: _____

Volas partopreni en Komuna Loĝado.

Mi alvenos Osaka'n je _____ h. de _____ a tago.

Subskribo: _____

Enskribu legeble nepre per Esperanto.

Sendu al: 大阪府下岡町壽通四丁目奥村氏方 藤岡常太郎

再版を機とし値下斷行!!

岡本好次氏著

エスペラント發音研究

菊版 60 頁 六號活字密組 裝幀優美 改正定價三十錢 送料二錢

エスペラントの發音を説明したものであるが、單にエス語の發音についての konsiloj や諸法則を勝手に獨斷的に説明したものでなく、各國の同志の説をさりいれ、猶發音學の初歩の説明を主とし、しかも理論に走らず懇切丁寧に説明したもの。第一版は誤植が多く甚だ申譯けなかつたが、再版の機會にこれら誤植はスツカリ訂正し、新裝をこらして出現した。尙この機會に徹底的値下を斷行した。

近
刊

エスペラント中等讀本 (第一輯) {價 30 錢
税 2 錢

マテオ・フアルコネ (對譯叢書) {價 35 錢
第一篇 {税 2 錢

倫敦塔 (上製殘部僅少) 上製 30 錢
至急御注文の事 並製 15 錢 税各 2 錢

東京市牛込區
新小川町 3 の 14

財團 日本エスペラント學會
法人

振替口座
東京 11325

學會會員倍加
運動に際し

新會員紹介者御芳名

昨年十二月東京中央放送局よりエスペラント講座放送を機とし本學會に於て會員倍加運動を提唱せることは同十二月本誌巻頭言所載の如くであつたが、本學會のこの意義ある企ては幸に多數會員の熱烈なる共鳴と支持を得、豫期以上の好成績を挙げた。本學會の運動及活動の原動力たる會員諸氏の御奮闘を深く謝されなければならない。學會の會員が一人増せばそれだけ學會の威力が増し、エスペラント運動の進展を意味する事となる。下は掲ぐる諸氏の御努力の結果、學會在來の陣容二千名に新に三百數十名の精銳を加へ得たのである。文字通りの倍加は見られなかつた。乍然現在の未だ凡てに承認される域に達してゐない時代、そして十二月の師走、加ふるにあの短期間に於てかゝる多數の同志を我が陣營に加へ得たと云ふ事實に對しては大なる喜びと誇りさを感じざるを得ない。我々の結束は日増しに強くなるそして一路に我々の勝利に向つて進み行く。御紹介下さつた下記の諸氏に厚くお禮いたします。(記録記載洩れの諸氏も相當あると思ひますが、若しそれを御發見になりましたら一應本學會編輯部宛に御申込み下さい。

【東京】佐々城松榮、田中熊三郎、木下利次、粟飯原晋、加藤正美、久米幸夫、高橋孝吉、和田孝雄、小林東二、丹内武雄、湯川旭、藤井要三、赤塚冴子、中垣虎兒郎、松本清彦、石野了三、エスクラビーダ・クルーボ、多木燐太郎【神奈川】岸本好憲、河合龍彦【埼玉】海保省吾【長野】濱井壽夫【富山】四十萬小平次【新潟】日末谷晴久【青森】木村忠藏【宮城】土井英一【愛知】白木欽松、下村鑛造、西脇弘道、山田弘、三輪義治、山本賢【京都】南順一、カニヤ書店【滋賀】中大路政治郎【岐阜】奥田穂浪【愛媛】二神眞敬【大阪】岡一郎、安田龍夫、辻本進【兵庫】進藤靜太郎【島根】渡邊遼二、鈴木力【鳥取】田村正【廣島】關口春夫【福岡】西原武宣、中山義雄、谷垣琢磨、福岡學會支部、植田半次【大分】麻生介、石丸鎮雄、福田啓二【佐賀】小野記彦【宮崎】黒木靜雄【鹿児島】石宙明【北海道】岡崎茂治、吉田榮、函館エス會【大連】淵田穂多雄(順序不同)

學會取次圖書(前金注文に限る)

故東宮氏が生前獨逸より輸入されたばかりの書籍です。御遺族の御依頼に應じて取次いたします。各種10部乃至20部あります。

★Palaco de Dangero.

(定價3圓、送料16錢)

Mabel Magnallsの原著のエス譯でその内容のみならずその装釘の優美なことは驚くばかりである。これは手練手管でかためたマダム・ボンパヅールの戀愛遊戲の渦の中に純真な amo に殉ずる人々が翻弄されてかゝる愛戀愛慾の物語。

★Bennemann: Esperanto-HandwörterbuchのII Teil, Deutsch-Esperantoの部

(定價4圓) (3.5寸×5.5寸)
(送料18錢) (455頁クローズ綴)

獨エス辭典として Christallerと共に最良の物。

★Sienkiwicz: Noveloj.

(定價80錢、送料2錢)

(Internacia Mondliteraturoの第16篇) 波蘭の大文豪 Sienkiwiczの短篇五篇をあつめたものでしかも Z博士の愛嬢 Lidja Zamenhofのエス譯せるものにして興味津津たる好讀物。

★Strindberg: Insulo de Feliĉuloj

(定價80錢、送料2錢)

(Internacia Mondliteraturoの第17篇) 北歐に輝く大文豪ストリンドベルヒの雄篇。必讀書。

★ザメンホフ演説集

(エス文のみ)

★我國に於ける外國語問題とエス

★日本語エスヘラ(三高)

★ント小辭典

★新魔王(エス文)

★心の片隅

★詩集花束

★カル口

★Unu paĝeto de mia lerneja vivo

(エロシエンコ原作エス文)

★日・エス會話と辭書(大道社版)

支・英 1.00 6錢

東京市牛込區
新小川町3の14

財團
法人

日本エスペラント學會

振替口座
東京11325番

エスペラント捷徑

最新最良の獨習
書本一冊を讀
破すれば立派な
學力をえられる

定價
1.00
送料
6

エスペラント初等講座

外國語を全然知
らぬ人に一通り
文法を平易に説
明した良獨習書

0.30
2)

新撰エス和辭典

語數一萬五千餘
譯語正確・索出
至便・新語豐富

0.75
2)

エスペラント講習用書

文法教科書と讀
本とを兼ねたる
講習用の良書

0.50
4)

エスペラント讀本

挿畫入初等用讀
本で程度低く小
中學生にも好適

0.30
2)

エスペラント中等讀本

興味をき読み物
數十篇を収む

0.30
2)

エスペラント發音研究

エス語發音上の
疑問を水解す

0.30
2)

エスペラントやさしい讀み物

笑話22篇を對譯
詳註し興味横溢

0.10
2)

マテオ・フアルコネ

(對譯詳註
叢書第一篇)

「カルメン」の作
者メリメの名篇
を對譯詳註す

0.35
2)

骸骨の舞跳

(秋田雨雀氏戯曲
三篇のエス譯)

0.40
2)

倫敦塔

(夏目漱石原作
エス譯)

0.15
2)

無代進呈 { ★エスペラント宣傳の【 葉 】(講習會頒布用)
百枚以下無料(但送料卅枚毎に4錢)百枚以上百枚毎に實費送料共65錢にて
★エスペラント宣傳の【チラシビラ】(街上展覽會等で配布すべきもの)
三百枚以下無料(但送料百枚毎に2錢)三百枚以上は百枚毎實費送料共10錢

★日本風景風俗エハガキ (四枚一組三色刷價廿錢送料二錢)(エス文説明付)

★綠星章 { 甲種(安全ピン止) 乙種(背廣用) 共に一個の價送料共三十錢
丙種銀臺特製品 一個五十錢 送料六錢
カウスポタン 一揃 (箱入) 一圓二十錢 送料六錢

★綠星旗 [紙製] (十枚送料) 半紙大原紙兩面綠色刷左角四分の一は白地に綠の星、
共十五錢 殘四分三は綠の地にエスペラントを白く抜きたるもの

故 東 宮 豐 達 君
遺兒教育後援會寄附金募集

締切迫る

御送金は學會の振替を利用さるゝも可

昨秋來募集中の寄附金はいよいよ来る三月末日で締切となりま
すから未だ御申込なさらなかつた方々は本公告御覽次第一日も
早く御應募下さい。

東京市外目白文化村五七 西 成 甫 方

昭和3年3月

東宮豐達君遺兒教育後援會發起人一同

寄附規定要項 (詳細は本誌一月號廣告又は昨年十二月號廣告御覽下さい)

◇金 額 一口二圓以上 (一人の寄附は額の多
寡に拘らず一口とす)

◇送 金 振替で下記のいずれかへ (但し上記後援會寄附
の旨御明記下さい)

(a) 振替口座 東京 75525 番 エスクラヒダ・クルーボ宛

(b) 振替口座 東京 11325 番 日本エスペラント學會宛

◇寄附者へは紀念として故人エス譯の『惜しみなく愛は奪ふ』
の特製本を贈呈。(目下小坂氏校閲中)

◎國字問題解決の先驅◎

月刊
雑誌

ローマ字世界

定 一 部 二 十 錢
價 一 年 前 金 貳 圓

◎日本の國字となるべき名譽と運命をなもつた日本式綴方による
ローマ字の雜誌!
◎標準的綴方としての日本式ローマ字を應用し實際化したローマ
字の雜誌を御覽下さい!
◎ローマ字の日本式綴方の論據、要點等に就ては郵券二錢を御送
り下されば『ローマ字のすすめ』といふ小冊子を差上げます。

財團法人

日本のローマ字社

振替東京二一五〇四・電話小石川七〇一

秋田雨雀・小坂狷二共著

模範エスペラント獨習

改訂第十八版

西洋の教科書の焼きなほしではない。語系を異にす
る日本人の爲めに全く新しい様式で講義されたもので
ある。外國語の素養なき初學者も趣味のうちに習得が
出来る。既知にエスペラントに熟達した人も他書に見出し
得ぬ知識を求め得られる。〔布裝三八〇頁・定價二圓・
書留送料十九錢〕

ブリヴァ著・松崎克己譯

愛の人ザメンホフ

他の萬國語が盡く失敗せる中にエスペラントのみひさり
今日の隆盛あるは何故ぞ。それは此の語が優秀であること
幾多熱心の士が崇高なるエスペラント主義、即ち人類主
義に感激し、身をすて、普及に努力し、努力しつゝあるか
らである。人類主義の教科書たる本書二〇〇頁を讀むは
エスペラント學習者の義務である。〔定價金一圓・書留送
料十三錢〕

東京市牛込區 文 叢 閣 振替口座 東京 八八二四 九八八番

Sur la scienca bazo de eksperimenta psikologio,
psika medicino kaj pedagogio,

Takamine Psikoteknika Laboratorio

【Mezuro-Bunkamura 1, Tokio, Japanujo.】

Celas sisteman kaj eksperimentan studadon:—

- (1) pri la inteligento, trajto, kaj saneco de infanoj kaj pri ilia instruado.
- (2) pri la elekto de okupo kaj esploro de taŭgeco por gejunuloj.
- (3) pri la klasigo de ĉiuspecaj lernejoj; pri la konsilo pri la okupo por lernantoj kaj pri ilia individueco.
- (4) pri la taŭgeco de laboristoj kaj oficistoj en ĉiuspecaj fabrikoj kaj kompanioj sur la psika kaj fizika vidpunktoj; pri la pliigo de ilia efikeco kaj saneco.

Demandoj pri la nomitaj problemoj estas volonte respondataj, enketoj laŭdezire farataj.

La laboratorio eldonas ĉiumonate la raporton (gazeton) pri siaj studoj:

“LA PSIKOTEKNIKO”

(Redaktoro: D-ro Takamine-Hirosi)

kies jara abono kostas: ¥ 4,70; 1 numero ¥ 0.50.

Por facila esploro pri la nomitaj problemoj la laboratorio vendas

Demandaron

(N-ro 1 kaj N-ro 2 ĉiu kostas ¥ 0.05)

Ili estas provizitaj per klerigo kaj normotabeloj kaj estas sen iu antaŭpretigo facile aplikeblaj.

ONI KORESPONDAS ESPERANTE !!!

高峰個性能率研究所は

〔東京市外下落合目白第二文化村第一號〕

實驗心理學と精神醫學と兒童教育學との三大科學に立脚して

1. 幼少年の——智能検査、心性考査、健康診査、教養相談。
2. 青年男女の——職業選擇、適性診査。
3. 各種學校の——學級編制、職業指導、個性診査。
4. 各種工場會社等の——従業員の心身兩方面より觀たる適性診査。經營上の能率増進と健康保健。

の各項目を系統的、實驗的に研究して居ります。随つて右の各問題に關する質疑應答や調査依頼には、時間の許す限り喜んで應諾致します。御遠慮なく御申越し下さい。

當研究所は毎月一回研究報告雜誌

「性能考査法の研究」

を出版す。〔一部 50 錢、一ケ年 4 圓 70 錢 (但前納)〕

又上記の諸研究に必要なテスト用紙は

性能考査用紙第一號 同第二號 各冊 實費五錢

として當研究所より發行致して居ります。各年齢に對する標準及査定法附きなれば直ちに實用に適します。

我國におけるエスペラント普及・研究・實用の中心機關

財団法人 日本エスペラント學會

【東京市牛込區新小川町三の十四】 【振替口座東京 11325 番】

- ◆すべての運動は大衆の協力に俟たねばならぬ。今やエスペラント普及運動は最も多衆の協力を必要とする時代。各地同志の大同團結が必要だ。個々人の叫びは個々人の叫びにすぎない。大衆の叫びは輿論の喚起だ。組織だつた協力こそ眞の力だ。
- ◆エスペラントを愛するものは誰しも御入會下さい。（會員は法規上維持員とよぶ）

- 目 的** エスペラントの普及・研究・實用
- 事 業** (a) エスペラントに關する各種の研究調査及其發表
(b) 雜誌及圖書の刊行等
(c) 講演會、講習會の開催及後援
(d) 其他本會の目的を達成するに必要な認むる事業
- 會 費** (a) 普通會員 年額 2 圓 40 錢 (b) 贊助會員 年額 5 圓
(c) 特別會員 年額 10 圓以上 (d) 終身會員 一時金 100 圓
- 入會手續** 住所、職業、姓名(振カナ付)を明記し會費一年分を支拂へばよい。
振替送金最も安全)
- 會 員 の 典 特** 1. 毎月研究雜誌“La Revuo Orienta”の配布をうく。
2. 出版圖書の割引をうくることあり
3. 語學上の質疑其他一般の問合の返事をうく
4. 宣傳の「榮」その他宣傳材料を無料でうくることを得

詳しいことは直接御問合せ下さい

役 員 名 簿 (五十音順)

理事長	理 學 博 士	中村 精 男	理 事	美野田 琢磨
理事		上野 孝 男		望月 周三郎
同	元鐵道省運輸局長	種田 虎 雄	慶大教授醫學博士	柳田 國 男
同	東京女子大學教授	河崎 な つ	東京朝日新聞顧問	小坂 狷 二
同	中央大學教授	川原次吉郎	鐵道省技師	大井 學
同		何 盛 三		三石 五 六
同	帝大教授文學博士	黑板 勝 美	事 高層氣象臺長	大石和三郎
同	政治教育會會長	小林鐵太郎	神奈川縣立農業學校長	清水勝雄
同	政修大學教授			木崎 宏
同	帝大名譽教授	高楠順次郎	同 帝大教授	德 積 重 遠
同	文 學 博 士	土岐 善 磨	同 法學博士	三島 章 道
同	東京朝日調查部長	西 成 甫	同 子	
同	帝大教授醫學博士			

(郵税共) 本誌購讀料			口座番號 本會振替		廣 告 料					發行所 對國 法人 日本エスベラント學會 東京市牛込區新小川町三ノ十四		印刷所 株式會社一匡印刷所 東京市神田區西小川町二ノ五		印刷人 高見澤保芳 東京市神田區西小川町二ノ五		發行人 大井學 東京市牛込區新小川町三ノ十四		編輯兼 大井學 東京市牛込區新小川町三ノ十四		昭和三年三月一日發行 昭和三年二月二十五日印刷	
一部 半年分 一年分	錢 24 圓 140	錢 260	基本金專用東京三〇八九番 一般(長野三二八三番) 會計用(東京一一三三番)	學會々員には無代頒布す	全頁	1回	3回	6回	12回	◆金錢に關係なき廣告四割引 ◆長紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁はお斷り ◆特別會員の廣告は二割引	東京市牛込區新小川町三ノ十四 電話九段(三三)二四一八番		東京市神田區西小川町二ノ五		東京市牛込區新小川町三ノ十四		昭和三年三月一日發行 昭和三年二月二十五日印刷				
					半頁	25圓	72圓	140圓	250圓												
			四半頁		13	37	74	130	70												
					7	19	38														

- ◆金錢に關係なき廣告四割引
◆長紙第三頁は二割増の事
◆表紙第二頁第四頁はお断り
◆特別會員の廣告は二割引